



## センター長報告

半年の活動を振り返って

2023年は、一神教学際研究センターの設立20周年です。当センターは、日本政府による「21世紀COEプログラム」の拠点形成の一環として、2003年に大型の助成金のもと設立されました。この20年間、私はCISMORリサーチフェローの中心的メンバーの一員として多くの活動を企画してまいりました。また、COVID-19(新型コロナウイルス)の感染拡大に見舞われた2～3年間を含む過去5年間は、センター長を務めました。この5年間は特に精力的に活動を実施し、コロナ禍にあっても、国内外の研究者と共に行ってきたワークショップやセミナー、講演会などを継続できるよう、活動の場をZoomプラットフォームに移すということも行いました。

今号でお届けするのは、2022年秋学期(2022年10月から2023年3月)に実施された活動についての紹介です。この秋学期は、これまでで最も濃密な学期の一つとなりました。CISMOR主催のワークショップ、セミナー、国内外の研究者による公開講演会の他、ユダヤ教、キリスト教、イスラーム、古代近東、また、政治と宗教といった、各研究分野における共催も含め、計17の活動に取り組みました。これらすべての活動の詳細については、次ページ以降をご覧ください。

「21世紀COEプログラム」から始まった一大拠点であるCISMORとして発行する本誌 *CISMOR VOICE* は、おそらく今号

で一区切りとなります。来年度以降、資金や活動の規模を変更したかたちでCISMORは続いていきます。これを一つの節目として、私がセンター長を務めた5年間におけるCISMOR事務局、および特別研究員の素晴らしい働きに感謝し、ここにお名前を挙げさせていただきます。2017～2021年度特別研究員の北村徹先生と阿部泰士先生、2022年度特別研究員の兼定愛先生と鍵谷秀之先生。また、2018～2023年度にかけて当センターの研究活動全般を支援し続けてくださった事務局の藤村直子氏には、特別な感謝をお伝えせざるにはられません。ここにお名前を挙げた皆さまには、各人の今後の活動の場におけるご成功を祈りつつ、お別れの言葉を伝えたいと思います。

2023年度からは、神学部の森山央朗教授にセンター長としての立場を譲り、新体制で当センターの運営を続けていくこととなりました。なお、CISMORのホームページは来年度以降も引き継がれ、今後の活動についても、開催前の告知や開催後の報告などが掲載される予定です。引き続き、当センターの活動をご支援いただきますよう、よろしく願い申し上げます。

2018～2022年度一神教学際研究センター長  
Ada Taggar Cohen

CISMOR リサーチフェロー研究会（古代近東・聖書研究部門）

## 第2回 古代中近東冥界研究会「冥界との交流」

主催：同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）

【企画者】 山本孟（山口大学教育学部講師／CISMOR リサーチフェロー）

【発表者】 新井雅貴 ほか2名（詳細は本文参照）

【コメンテーター】 渡辺和子 ほか2名（詳細は本文参照）

【日時】 2022年9月24日（土）10:00-11:50

【会場】 Web会議システム“Zoom”プラットフォーム



山本孟氏

2022年9月24日（土）、「第2回 古代中近東冥界研究会「冥界との交流」」(Zoom)が開催された。コーディネーターは、CISMOR リサーチフェローの山本孟が務めた。プログラムは以下の通りである。

**10:10-10:40** 新井雅貴（同志社大学）  
「ヘブライ語聖書における死者崇拜と墓の重要性について」

**10:40-11:10** 肥後時尚（金沢大学）  
「古代エジプトの死者と生者の交流について」

**11:10-11:40** 山本孟（山口大学）  
「古代アナトリアの水辺・沼地と死後の世界」



新井雅貴氏

発表者は、「冥界との交流」を中心に、専門の古代アナトリアとエジプト、聖書世界にかんする研究について報告した。各発表には、東洋英和女学院大学名誉教授の渡辺和子先生と、同志社大学神学部教授・CISMOR センター長のアダ・タガー・コヘン先生、同志社大学神学部講師・CISMOR リサーチフェローの北村徹先生からコメントをいただいた。発表内容とコメントは以下の通りである。

新井雅貴氏の発表では、死者が力をもつと考えられ、崇拜されていた古代オリエント世界にありながら、ヘブライ語聖書がいかに死者崇拜を批判しているかについて考察された。昨年度の研究会では、墓に埋葬された死者（レファイム）と、埋葬を否定された死者の両方が、ヤハウエ神の前では無力であると主張するイザヤ書 14 章 9-10 節の主張を中心に分析した。結果、この詩文が、ヤハウエとの対比によって死者の力を否定し、死者の力を求める儀礼の有用性を否定したことが明らかになった。本発表では、さらに考察を深め、墓を死者崇拜の場とする考え方をヘブライ語聖書がいかに評価

しているかについて、ヤハウエ崇拜との関連から分析した。

エレミヤ書にはヤハウエとの契約に違反したエルサレムの人々の死体が野に晒されるとの描写がある。Morton Cogan は、エレミヤ書とアッシリアの文書に現れる埋葬の否定というモチーフを比較し、この描写は、死後に埋葬されず供物を受け取れない状況になることを誓約違反者への罰とするアッシリアの文書と共通する点を指摘する（“A Note on Disinterment in Jeremiah,” 1971）。今回の発表では、Cogan の見解にヘブライ語聖書の死者崇拜批判という観点を加え、イザヤ書 14 章 4b-20 節における埋葬の否定というヤハウエの罰が、墓を死者崇拜の場とする考え方を前提とすることを示した。イザヤ書 14 章は、13-14 節で神のようになることを望んだ外国の王を批判し、19 節で彼が墓に埋葬されないことを主張する。死者崇拜が、墓を祭儀の場とし、供物を捧げて生者の守護を祈願する死者の神格化であることを踏まえると、この描写は王の死後の神格化について述べ、埋葬の否定は墓を死者崇拜の場としてみなした罰として主張されていると考えられる。イザヤ書 14 章 4b-20 節の詩文は、より広いイザヤ書 13~14 章の流れでみた場合、バビロン捕囚の終焉にむけて、解放される自国と滅亡する外国を対比する文脈に置かれている。預言者は、ヤハウエ崇拜の立場からみて不当とみなされるユダ・イスラエルの王に対しても墓に埋葬されないことを罰としている（列王記上 14 章 11-13 節、エレミヤ書 22 章 18-19 節）。このことから、この詩文は、外国の匿名の王への批判という形式をとった、預言者から自国の王への警告である可能性があるといえる。同詩文は、ヤハウエ崇拜の立場から死者崇拜を禁止する反面、死者が供物を受け取る場として墓が重要視された点を認識し、むしろ、その点を利用して、死者崇拜において重要な墓を取り上げることをヤハウエ

崇拜に反した者への罰として主張していると結論づけられた。

渡辺先生からは、発表内で言及したアッカド語文献の最新の解釈、および宗教学の観点から死者崇拜にまつわる用語についてご教示いただいた。また、ヘブライ語聖書が念頭に置いていると思われる古代オリエント世界の具体的な死者崇拜について改めて考え直すきっかけとなるご指摘をいただいた。コヘン先生からは、戦争の勝敗で王の罪の有無が表されるという視点についてコメントいただき、戦死したが墓に埋葬された王について述べる列王記下23章について議論することができた。北村先生からは、エゼキエル書39章の外国との戦争の文脈や、死体や墓を穢れたものとして扱う考え方がみられる43章でも死者崇拜と墓の関連を念頭に置いた解釈が可能となる点について、ご見解をうかがえた。

肥後氏の発表では、生者から死者へ、あるいは（生前の）死者から生者へのメッセージを伝える資料から、古代エジプトにおける冥界が考察された。古代エジプトでは、古くから生者と死者が明確に区別され、冥界は死者が墓地に埋葬後に住まう場所と信じられた。冥界の描写は「ピラミッド・テキスト」や「コフィン・テキスト」、「死者の書」のような葬祭文学に確認され、これらの内容から各時代の冥界観の一端が理解される。一方、葬祭文学の主たる利用目的は、呪文の所有者である死者の冥界での復活と安寧であったため、冥界と現世の関係性や生者と死者との交流を示す描写に乏しい。そのため、現世を生きた古代エジプト人が冥界をどのように捉え関わったのかを理解するためには、葬祭文学とは異なる史料が必要である。発表では、葬祭文学における生者と死者・現世と冥界の相関関係の記述の検討を踏まえ、新たにいわゆる「死者への書簡」と私人墓に刻まれた碑文史料に注目された。「死者への書簡」は生者から死者に宛てた書簡であり、多くは生者が亡き近親者に向けて生者やその家族への加護を依頼する内容である。私人墓の碑文には墓の所有者の自叙伝や死後の供物を願う碑文に加え、墓の所有者が生者に向け語りかける内容の碑文が確認される。本発表では、これら二つの史料群の特徴を概観し、生者と死者の相関関係を示す文書の内容を分析することで、両者の交流の観点から古代エジプトの冥界観が検討された。

渡辺先生からは古代エジプトにおける悪霊を祓う職業についての質問があり、肥後氏は医者に相当する職業の者が身体に悪影響を及ぼす悪霊に呪文を唱える記述を例示した。コヘン先生からは、水域や川が冥界といかに関連するのか、古代メソポタミアとも比較して理解を深めるのが良いとのコメントをいただいた。北村先生からは、冥界での復活と安寧がかなわない場合、現世に悪影響が及ぼされる事例があったのかとの質問があったのに対しては、死者が現世に害悪をもたらすようになる経緯は現時点では不明瞭のため、今後とも検討を続けたいとの回答があった。

最後に山本は、前2千年紀ヒッタイト時代の宗教における「水」の役割について報告した。ヒッタイト文書からは、川や泉などが冥界に通じていると信じられたことがわかる。また、王国時代のいくつかの水関連施設も冥界との交流の場であったのかもしれない。このような川や泉、人工の水関連施設の水は澄んだ印象を受けるが、他方濁った水辺も冥界といかにかかわるのかについても検討した。ヒッタイト語で「沼」を意味する語 *marmarra-* は、テリピヌ神話に現れる。神話では、農耕神テリピヌが「豊穡」を沼に持ち去り、自らも沼に隠れたため、世界が荒廃してしまうとされる。この場合の「沼」は、都市外の農業生産が難しい場の象徴であった。テリピヌはそこで水と一体化することで見えなくなってしまうのだが、これは一種の仮死状態を表したかもしれない。そのように考えれば、「沼」も冥界へ続く水場の一つとみなせるのだと結論づけた。

渡辺先生からは、発表内で言及した『ギルガメシュ叙事詩』第7書板の特殊性等にご指摘いただいた他、コヘン先生からは当時アナトリアが現在より森林に覆われ水源豊かであった点が指摘された。北村先生からは水源と王権の関係についてご質問いただいた。

今回も各発表者の冥界にかかわる研究の進展が報告された。コメンテーターの先生がたには、上に紹介したご助言を始め、多くのことをご教授いただきました。この場をお借りして改めてお礼申し上げます。

(CISMORリサーチフェロー 山本孟)



肥後時尚氏

2022 年度第 3 回 CISMOR セミナー

## White Evangelical Populism: Its Historical, Religious, and Political Development and Its Meaning for US Policy

共同主催：同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）、同志社大学アメリカ研究所

【講師】 Marcia Pally（ニューヨーク大学教授）

【日時】 2022 年 10 月 2 日（日）9:30-11:00

【会場】 Web 会議システム “Zoom” プラットフォーム



Marcia Pally 氏

2022 年 10 月 2 日（日）、Marcia Pally 氏を講師に迎え、セミナー “White Evangelical Populism: Its Historical, Religious, and Political Development and Its Meaning for US Policy”（白人の福音派のポピュリズム：その歴史的・宗教的・政治的展開およびアメリカの政策における意味）を開催した。

キリスト教ナショナリズムは、アメリカにおける政治権力の一定の配分を目指す政治運動である。この運動において、アメリカは政治的、経済的、社会的に、ある種の保守的なキリスト教の考えに従って統治されるべきとされる。メンバーが所属するキリスト教の宗派は問われず、メンバーに宗教的な信念や実践が希薄な場合すらある。白人福音派は、現在アメリカの有権者の 25% を占め、国内政策と外交政策の両方に大きな影響力を持つ。

一般的に、白人福音派はトランプを支持する権威主義者で、中絶の問題が彼らの票を動かすというイメージがある。しかし、これらは真実ではない。後述するように、彼らは権威主義志向によってトランプを支持しているわけではなく、また、必ずしも中絶の問題に対する政策が白人福音派の票を動かすわけでもない。2016 年の大統領選挙では、白人福音派の 46% が合法的な中絶の権利を支持している。福音派の候補者選出において最も重要な要素は、経済と国家安全保障である。それでは、白人福音派がトランプを、そしてより広範には右翼ポピュリズムを支持する理由は何か。その背景には、白人福音派の抱える強迫観念がある。

白人福音派の抱える強迫観念の源には複数の要因がある。まず、古い産業分野における失業や不完全雇用の問題を挙げることができる。グローバル化した貿易やオートメーション化、生産性の向上により、大卒者以外が不平等な負担を強いられることとなった。社会的地位の喪失は、自分の居場所を失うこと、下層階級へと転落することへの不安を伴う。加えて、社会規範の変化や進化論の影響などによって、キリスト教の文化的優位性は徐々に低下した。自身を無宗教であると主張するアメリカ人は現在、全体の約 30% であり、18 歳から 29 歳では 36% である。2070 年には、キリスト教徒はアメリカ人の半分から 3 分の 1 程度になる可

能性がある。さらに、ドイツで始まった歴史批評的聖書解釈は、19 世紀を通じて多くのアメリカ人入植者と福音主義者たちが信じた終末論的聖書理解への信頼を揺るがした。また、20 世紀半ば以降、公民権法、反貧困プログラム、フェミニスト運動、ゲイの権利運動などにより、文化的支配力を失ったという意識を白人福音派はさらに強くした。以上のような変化は白人福音派の喪失感を強め、「我々と彼ら」という枠組みが強調される事態となった。その結果として、人種差別的、外国人排斥的な感情が白人福音派の中で深まることとなったのである。

白人福音派の強迫観念は、初のアフリカ系アメリカ人大統領が選出されたことでさらに悪化した。バラク・オバマは、有色人種や女性の地位を高めただけでなく、小さな政府を好む白人福音派の考えに反して、ビジネス規制や社会支援における政府の役割を拡大させた。一方、トランプは、「テロリスト」や「強姦魔」「麻薬ディーラー」といった過激な言葉を用いて、イスラム教徒やメキシコ人をはじめとする外国人の排斥を約束した。また、政府の過干渉であるとして、税金、社会サービス、ビジネス規制を削減した。2020 年の選挙では、白人福音派の 84% がトランプに投票したが、彼らはトランプを権威主義的観点から支持したわけではない。トランプ支持の背景には、むしろ、権威主義への抵抗が認められ、彼らは小さな政府を標榜している。これは白人福音派にとって自由のための戦いなのである。政府の社会福祉事業に対する彼らの抵抗は、墮落した連邦政府が血税を価値のない怠惰な少数民族や移民に与えているという認識から生じている。つまり、彼らがトランプに投票するのは、政府による専制政治を抑制するためなのである。

Pally 氏は次のように結論づけた。白人福音派は、国家権力を抑制できるか否かに自分たちの幸福がかかっていると考え、政府による社会事業やビジネス規制の削減、減税を求めている。同性婚や中絶などへの反対の背景にも、白人福音派内の統一意見があるわけではなく、複数の動機や要因が絡み合っているのである。なお、講演後は 15 名の参加者との間で充実した質疑応答が行われた。

(CISMOR 特別研究員 鍵谷秀之)

## Zen Buddhism and Jewish Mysticism: Comparative Perspectives

主催：同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）

【講師】 Boaz Huss（ネゲヴ・ベン＝グリオン大学ゴールドスタイン・ゴーレン  
ユダヤ思想学部教授）

【日時】 2022 年 10 月 22 日（土）16:00-17:30

【会場】 Web 会議システム “Zoom” プラットフォーム

2022 年 10 月 22 日（土）、Boaz Huss 氏を講師に迎え、CISMOR セミナー、「Zen Buddhism and Jewish Mysticism: Comparative Perspectives」（禅宗とユダヤ教神秘主義：比較考察）を開催した。

鈴木大拙とマルティン・ブーバー、釈宗演とゲルショム・ショーレムなど、禅とユダヤ教神秘主義の学者たちの生涯や研究の類似性は、複数の研究者によって指摘されている。しかし、異なる歴史的・地理的背景において発展したこの二つの伝統は、そもそもなぜ比較されるのか。このことを考える上で、Huss 氏は禅とハシディズムの比較研究の根底にある前提や動機に着目する。

禅とハシディズムの比較研究を最初に行ったのはマルティン・ブーバーである。ブーバー曰く、禅もハシディズムも、師と弟子の関係性を中心に据え、「真理とは人間存在の生きた経験の中に見出される」という信念を訴える。ユダヤ教学者の手島佑郎によれば、両者の中心には神秘的な自己研鑽がある。手島はそれらを社会的・精神的改革運動とみなし、それぞれの宗教が儀式や教義に偏り、精神性が停滞した状況への応答であったと述べる。同時に、ハシディズムは神への帰依を目指す一方、禅は自己の本性に目を向けるなど、相違点もある。これらの比較研究に通底するのは、禅とハシディズムが純粋に宗教的ないし神秘的な体験を目指す精神的改革運動であるという前提である。

禅の学術的研究は、18 世紀後半から 19 世紀初頭にかけての西洋のキリスト教神学者、哲学者たちの関心に端を発している。ポール・ケーラスは 1896 年の『仏陀の福音』で、精神的神秘宗教としての仏教の認識を世に広め、西洋において仏教は、東洋の神秘的な精神を代表するものとして認識された。19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、日本の学者は、西洋側のそのようなイメージを受け入れ、禅宗の研究を発展させた。その中心人物の一人が、禅の改革者、釈宗演である。また、釈宗演の弟子である鈴木大拙は、純粋な神秘経験としての禅仏教概念の伝播に貢献した。ユダヤ人学者と日本人学者は、仏教とカバラとハシディズムを神秘主義の一形態とする西洋側の視点を採用した。一方で、西欧による認識の一部を拒否し、その応答として、神秘主義に対する認識と解釈を発展させた。ユダヤ人学者は、

ユダヤ教が物質主義的、法治主義的であるという前提を拒絶した。また、神秘主義が普遍的現象であるという考えを受け入れた日本とユダヤの学者らは、各々の神秘主義の特性を強調し、自文化の神秘主義の優位性を説いた。例えばブーバーは、ユダヤ教神秘主義の最高峰であるハシディズムこそが唯一、悟りと啓示が完全に一致する神秘主義であると強調した。鈴木も、禅こそが神秘的真理と精神的悟りを得るための最も効果的な方法を提供すると主張した。

オリエンタリズムの言説の中で、「近代的、合理的、進歩的、物質主義的な西洋」と「前近代的、非合理的、未発達、精神的、神秘的な東洋」は、対比的に認識された。これに対して、ユダヤ人と日本人の学者たちは、オリエンタリズムの視点の一部を採用することで、肯定的イメージを強調し、否定的イメージを反転させようとした。そして、神秘的で精神的なオリエンタリズムが自国の文化的中心にあるという考えを繰り返し唱えた。神秘主義を普遍的な現象としてとらえながらも、自らが研究し、広めた神秘主義の特性を強調したのである。

鈴木は仏教の研究と実践を国家の文脈で展開し、禅を仏教の最も発展した形態であるとして、日本の国民性、美学と芸術、武士道と結びつけた。また、日本の一元論・神秘主義と西洋の二元論・物質主義との違いを強調した。これと同様に、ブーバーは、ユダヤ人の民族的精神の表現として、ユダヤ神秘主義をユダヤ教精神の内奥を明らかにする大いなる知恵として捉えた。ブーバーらユダヤ人学者は、ユダヤ神秘主義をユダヤ教の生命力とみなした。また、ユダヤと日本の学者はともに、神秘主義や純粋な宗教体験こそ、儀式的・法定的で硬直した宗教制度に対抗するものであると考え、禅宗とハシディズムを民衆の内面を表現する解放的な精神的改革運動と考えた。

現代の禅仏教研究とユダヤ神秘主義研究に関する研究史分析の進展により、ナショナリズムとオリエンタリズム、神秘主義の具体的な関係性がよりいっそう明らかになるであろうと Huss 氏は締めくくった。講演後は、13 名の参加者との間で活発な質疑応答が行われた。

（CISMOR 特別研究員 鍵谷秀之）



Boaz Huss 氏

CISMOR リサーチフェロー研究会（イスラーム研究部門／啓典解釈研究セミナー）

## クルアーンを理解と解釈：古典期ウラマーの実践を中心に

主催：同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）

【講師】 大川玲子（明治学院大学国際学部教授／  
ジョージタウン大学 ACMCU 客員研究員）  
竹田敏之（立命館大学 立命館アジア・日本研究機構准教授）  
【企画者】 兼定愛（CISMOR 特別研究員）  
【日時】 2022年10月30日（日）10:30-13:00  
【会場】 Web 会議システム “Zoom” プラットフォーム

2022年10月30日（日）、「クルアーン  
の理解と解釈：古典期ウラマーの実践  
を中心に」というテーマのもと、大川玲  
子先生と竹田敏之先生を講師としてお招  
きし、クルアーン本文の背景にある緻密  
な解釈理論と実践について、また、クル  
アーンを正しく継承するための学者の営  
為についてご講演いただいた。

ユダヤ教、キリスト教、イスラームと  
いう一神教が啓典に基づく宗教である以  
上、啓典解釈学は世界中で展開する学問  
である。しかし、イスラームの啓典解釈  
学を含むクルアーン自体を対象とする研  
究は日本ではまだ少なく、この分野を志  
す若手研究者が身近な研究者から助言を  
受ける機会は限られている。一方、思想  
研究の枠組みで啓典と向き合うにあたり、  
「啓典を解釈するとはどういうことか」と  
いう根本的な問いへの多角的な視点を獲  
得することは肝要である。この状況を踏  
まえ、イスラームの啓典解釈とその関連  
研究について、第一線の研究者による講  
演を CISMOR のプラットフォームを活か  
して提供し、意見交換を行う機会を設け  
る運びとなった。プログラムは次の通り  
である。

### 10:30-10:35

センター長挨拶：アダ・タガー・コヘン（同  
志社大学神学研究科教授／CISMOR セン  
ター長）、趣旨説明：兼定愛

### 10:35-11:35

大川玲子「クルアーンにおける「天の書」  
関連句をめぐる解釈の展開」、質疑応答

### 11:40-12:40

竹田敏之「クルアーン読誦学とアラビア  
語正書法の展開：ラスム学の5原理とそ  
の主要著作」、質疑応答

### 12:40-13:00

自由討論、閉会

大川氏は、「クルアーンにおける「天の  
書」関連句をめぐる解釈の展開」という  
テーマのもと、『イスラームにおける運命  
と啓示：クルアーン解釈書に見られる「天  
の書」概念をめぐる」（晃洋書房、  
2009年）の解題に加え、その後の研究を  
踏まえて手法などの振り返りも行った。  
概要は次のとおりである。

イスラームの信仰では伝統的に「天の  
書」の存在が認められてきた。「天の書」は、  
全被造物の運命が書かれた「運命の書」と、  
クルアーンという言葉が書かれた「啓示の書」  
の役割を持つとされる。その存在の根拠  
はクルアーンの章句に見出されるが、そ  
れらは曖昧で解釈の幅が大きい。『イス  
ラームにおける運命と啓示：クルアーン  
解釈書に見られる「天の書」概念をめぐる  
』では、古典期のタバリー（923年没）  
から、近現代のアブドゥ（1905年没）や  
マウドゥーディー（1979年没）を含む9  
人の解釈者のクルアーン解釈書（タフ  
スィール）を通してその意味を検討した。  
手法としては、クルアーンの「天の書」  
関連句をトピックごとに分類し、主要解  
釈書を時系列で読み解き、解釈史を分析  
し、全体像を示した。

クルアーンでは、アッラーの全知性を  
示す「明瞭なキターブ（書）」（6章59節  
など）という表現が繰り返されるが、そ  
れが物理的な書物か否かなど具体的な解  
釈は分かれている。また、「隠されたキター  
ブ」（56章77～79節）や「護られた書板」  
（85節21～22節）という表現は、クルア  
ーンの原型が天にあるという信仰や解釈を  
生んでいる。これらの解釈では、天にあ  
るクルアーンの原型が地上に下されたこ  
とは述べられているが、降下のプロセス  
への言及はない。それについては、人々  
が「ゆっくりと読誦できるように」（17  
章106節）と、降下の理由を示す章句の  
解釈に着目する必要がある。

これら三つのトピックについて解釈書  
を分析すると、近代前後で解釈の断絶が  
あり、方向性の変化が生じていることが  
分かる。伝承による解釈書の中でも、古  
典期のタバリーは伝承を網羅しつつ深読  
みはせず、後代に伝承が多様化・具体化  
していく。個人見解による解釈書では、  
伝承に目を配りつつ解釈者の見解やそれ  
を支える議論が展開される。いずれにし  
ても、運命が書かれた書板が天にあり、  
そこから適宜啓示が下されたという解釈  
が直接否定されることはなかった。一方、  
近代後は、クルアーンに明記されていな  
いことは「分からない」と認めてそれ以  
上の解釈は慎むべきであるという考えが  
示され、古典期ほど伝承に依存すること  
はなくなった。



大川玲子氏

大川氏は、三つの視点を提示して講演を締め括った。①90年代以降、ウラマー以外の人々も解釈書と呼ばれる書物を出版するようになった。「天の書」関連句についてそれらの多様な現代的解釈を分析すると、新たな視点を得られる可能性がある。②ウラマー以外による現代の解釈書でも、古典期の主要解釈書を踏まえて議論が展開される。その意味でも、古典期の解釈を参考に「啓典を研究するとはどういうことか」を考えることは重要である。③アミナ・ワドゥードの博士論文が現在解釈書として広く読まれているように、ムスリムの研究者による研究書と解釈書との境目が不明確で、特に近年は学問的な枠組みが曖昧になっている。

続く竹田氏は、「クルアーン読誦学とアラビア語正書法の展開：ラスム学の5原理とその主要著作」をテーマとして、アラブ世界におけるラスム学と現代アラビア語の動態を地域研究の手法で明らかにすることを目的に、議論を展開した。概要は次のとおりである。

現代イスラーム世界の多くの地域では、クルアーン1章4節の「主宰者」という単語を「マーリキ」と読む（他の読み方は「マリキ」）。綴りに着目すると、現在普及しているクルアーン刊本（ムスハフ）である1983年のマディーナ版でも、1923年のフアード版でも、「マーリキ」の長母音は文字の上に付される記号のように小さいアリフで表記されている。これは、クルアーンのいわゆる正統な綴りとしての「ウスマーン綴り」に則るためである。それは、第3代正統カリフ・ウスマーンの采配のもと650年頃に成立したクルアーン写本の原本（いわゆる「ウスマーン版」）に基づく、母音記号も同形文字の識別点もないいわば「線」のみの綴りである。写本や初期の刊本の中には発音のままに長母音を表わす文字としてのアリフで表記されている事例も多いが、特にフアード版の普及以降、正統な綴りへの関心が急速に高まり、結果として現代では小さいアリフで表記するムスハフが主流となっている。

一方、読誦としては、「マーリキ」も「マリキ」も正統である。このことは、20世紀初頭の東洋学者による「発展途上の綴りから複数の綴りが生じた」という主張とは逆に、複数の読誦が先にあり、ウスマーン綴りはそれら複数の読誦流派の視覚的補助機能を担うものであったことを示している。なお、イスラーム世界では、読誦流派間に僅かな差異があるにせよ、クルアーンが複数あるという認識はなく、一つのクルアーンを、ムハンマドが当時のアラブ部族の多様な方言で読み聞かせた（そのように啓示が下った）と考えられている。

最初の正書法改革は、社会の言葉の乱れに懸念を抱いたドゥアリー（668年没）による、語末母音を補助的に表記する丸点（ヌクタ）の開発である。後に同形文

字の識別点も開発され、それぞれの点を色分けするカラフルな写本が生まれたが、色の多用は混乱を生んだ。そこでハリール（789/91没）は単色で識別可能な記号を考案した。一方、8世紀中頃にはアッバース朝下で二つの正書法が確立した。音と文字が対応する「キヤースイー（類推型）」と、預言者や教友に遡る規範としてのウスマーン綴りに則る「ラスム」である。

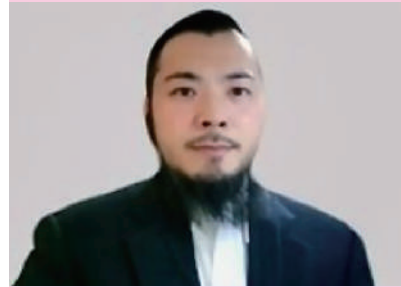
「ラスム学」の体系化は、11世紀、マグリブやアンダルスを中心に行われた。背景には、東方では書体など芸術面に關心が集中していたことや、東方でのハリール方式への移行に対抗して西方ではドゥアリー方式の保持・研究の機運が高まったことなどがある。ダーニー（1053年没）は、ラスム学の5原理（文字の省略、文字の追加、ハムザ、文字の置換、分かち書き・繋ぎ書き）によりクルアーン綴りを類型化した。イブン・ナジャーフ（1103年没）、シャーティビー（1194年没）、ハッラーズ（1318年没）の功績も大きく、西方で展開したラスム学の著作が現行のムスハフの典拠になっている。

これらを踏まえて、竹田氏は講演の最後に次の3点を指摘した。①綴りにも東西で流派があり、ワルシュ流派のムスハフには丸点の援用など古風な傾向が見られる。②現代アラビア語における大半の読み方はハフス流派を規範とするため、言語教育ではハフス流派を参照すべきである。③現代におけるラスム学の復興は正書法の規範意識に今後も影響を与えるであろう。

講演後には参加者から興味深い視点が提示された。例えば、クルアーンとミシュナの「自己定義する啓典」としての共通点、クルアーンの「カドゥル」とヘブライ語聖書・イザヤ書の関連箇所との関係、古代宗教の「天の書」概念、テクスチュアル・クリティシズムにおけるウラマーとマソラ学者との共通点、プロテスタント聖書学者のラスム学への影響、解釈書の分類と解釈者同士の認識、ムハンマドの読誦を「揺らぎ」と捉える可能性、日本でクルアーンを研究する意義、などである。講師からは各質問に丁寧な回答をいただき、国内外の研究環境や現地調査に関する経験談も共有された。

本セミナーには、企画段階より二つの目的があった。まず、啓典研究に取り組む研究者が専門的な内容や手法について質問でき、建設的な議論ができる場となること。また、一神教研究という枠組みで啓典研究に役立つ視点を共有し合い、ネットワーク構築の契機となることである。当初より度々ご助言をくださった森山央朗先生（同志社大学神学部教授／CISMOR リサーチフェロー）をはじめ、関係者の協力によりこれらの目的は達成された。来年以降もCISMORの特性を生かしてセミナーの続編を開催したい。

（CISMOR 特別研究員 兼定愛）



竹田敏之氏

2022年度第5回 CISMOR セミナー／リサーチフェロー研究会（ユダヤ学研究部門）

## 第5回「シオン／エルサレム／聖地」観の再検討： 聖書テキストから今日に至るまで

主催：同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）

共催：日本学術振興会（JSPS）科学研究費若手研究「20世紀アメリカ・ユダヤ思想家からみるシオニズム思想：その批判と受容の変遷史」（18K12210：石黒安里）

【企画者】石黒安里（同志社大学アメリカ研究所助教／CISMOR リサーチフェロー）

【発表者】ハナン・マゼー（The Berkowitz Research Fellow,  
New York University School of Law）

【日時】2022年11月6日（日）9:30-11:00

【会場】Web会議システム“Zoom”プラットフォーム



ハナン・マゼー氏

2022年11月6日（日）、講師にハナン・マゼー氏（The Berkowitz Research Fellow, New York University School of Law）を招き、CISMOR セミナーが開催された。マゼー氏は古代後期のラビ文献を専門とし、ラビ文献に見られる当時のユダヤ社会や異邦人との関係に関心を持ち、ヘブライ語や英語で論文を発表してきた。今回のセミナーでは、“*And the Lord your God will bring you into the land that your fathers possessed, and you shall possess it* (Deut. 30:5): The Land of Israel in Rabbinic Literature” というタイトルで現在進行中の研究の一部について報告がなされた。同氏は、西暦1世紀以降のラビ文献（とりわけミシュナ、トセフタ、パレスチナ・タルムードのなかで、「イスラエルの地」という用語がいかに解釈されてきたか、また「イスラエルの地」の範囲について、ハラハー（ユダヤ宗教法）による定義の展開に着目しつつ考察した。マゼー氏は、①領域（territory）に関するゆるやかなモデルと②土地の民族的占有（Ethnic occupation of the Land）という二つの観点から検討した。講演の概要は以下の通りである。

古代後期のラビ文献の作者が生まれた西暦1世紀のパレスチナはローマの支配下にあった。紀元70年にエルサレムにあった第二神殿の崩壊後、ユダヤ人社会・ユダヤ教の中心地はエルサレムではなく、北部ガリラヤ地方にあった。当時のユダヤ人は異邦人と隣接しながら暮らしていた。特に当時、シリア北部の領域は行政的にも経済的にもローマ帝国東部の中心地であり、その影響力は「イスラエルの地」にまで及ぼされた。ラビらはこの状況を前に、「イスラエルの地」を限定的な空間として定義することに苦心した。例えば、ハラハー的な観点から、土地の聖性という問題に直面した。ユダヤ教では安息年の規定（シュビター：7年に一度畑を休閑地とすること）があった。しかし、異邦人の土地であればそれは不浄とされ、安息年の規定の履行の義務が認識されていない場合は安息年の規定を免除した（トセフタ Oholot 18:14, 3世紀頃）。また、レホブ碑文（7世紀）は「イスラエルの地」の境界線を確認するうえで重要な証拠であり、ベト・シヤン周辺のハラハー的領域について詳細に記載されている。トセフタ Shevi' it 4:6 には「イス

ラエルの地」は、シリアーパレスチナ間の境界に位置するクヅジブ（Kezib）の南の川からその先までと定義されている。また、トセフタ Terumot 2:12 では、「イスラエルの地」の内と外に関する記載がある。ミシュナ Sheviit 6:1（1世紀初頭）では、安息年の規定に照らして、「食すること、耕すこと」の可否について、詳細に三つの領域に分けている（Hallah4:8、同時代のミドラッシュ Sifre Deut. 51も参照）。しかし、同ミシュナの記載はヘブライ語聖書に記載されている王国とは必ずしも合致しない部分があるなどの問題を考慮する必要が指摘された。また、トセフタ Kelim A1:5 の記述は「イスラエルの地」の領域に関するハラハーの多様性を提示している。これらのテキストに見られるラビらの必ずしも一貫性を持たない曖昧な描写は、ラビらの関心が「領域」そのものではなく、ハラハーの遵守に関心があることを提示している。パレスチナの北部（シリアとの境界線）について、「イスラエルの地」に含むか否かはユダヤ・アイデンティティにとって重要な関心事であった点が強調された。

以上、本講演では、ミシュナ、トセフタ、パレスチナ・タルムードといったパレスチナで生まれ出されたラビ文献を詳細に検討することにより、領土とその規制に関するいくつかの解釈と概念の展開を辿ることで、「イスラエルの地」の範囲について限定的な空間として定義しようとしたラビらの姿が浮き彫りにされた。これらのテキスト内で示された「イスラエルの地」の概念の展開を通して、3-4世紀のローマ帝国の支配下にあったパレスチナにおけるラビ共同体の心理状態の特徴を垣間見ることができた。それは、政治的・人口的・経済的に大きく変化した空間をラビたちがどのように再認識しようと試みたのか、その足跡を辿るとともに、ローマによる支配下におけるアイデンティティの葛藤を知る手がかりともなるのである。

講演後、15名の参加者との間で活発な質疑応答がなされた。質問の中には、今回の報告内容から発展したテーマ（現代イスラエル国家の領土観に関するもの等）も含まれていたが、マゼー氏は自らの専門の立場から真摯に受け答えを行った。

（CISMOR リサーチフェロー 石黒安里）

※CISMOR リサーチフェロー研究会（ユダヤ学研究部門）は、石黒安里（同志社大学アメリカ研究所助教／CISMOR リサーチフェロー）と平岡光太郎（同志社大学神学部嘱託講師／CISMOR リサーチフェロー）による共同企画である。



## Revisiting Identity Politics in Iran and Its Surrounding World in the Age of Information Warfare

主催： 同志社大学グローバル・スタディーズ研究科  
日本学術振興会 (JSPS) 科学研究費基盤 A「ハイブリッド戦争時代における新たな安全保障学の構築：中東ユーラシア地域の事例から」(22H00051：中西久枝)  
共催： 同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)

【講師】 Seyed Ali Alavi (ロンドン大学東洋アフリカ研究学院 (SOAS) 講師)  
【企画者】 中西久枝 (同志社大学グローバル・スタディーズ研究科教授／CISMOR 幹事)  
【日時】 2022 年 11 月 7 日 (月) 17:00-18:30  
【会場】 同志社大学烏丸キャンパス志高館 1 階会議室／Web 会議システム “Zoom”

2022 年 11 月 7 日 (月)、同志社大学グローバル・スタディーズ研究科主催、CISMOR 共催の国際会議が開催された。講師はロンドン大学東洋アフリカ研究学院の Seyed Ali Alavi 氏で、テーマは “Revisiting Identity Politics in Iran and Its Surrounding World in the Age of Information Warfare” (情報戦時代におけるイランとその近隣世界のアイデンティティ・ポリティクス再考) であった。概要は次のとおりである。

1993 年にイランの大学がグローバル・ネットワークに参入すると、政府による規制強化と同時に並行で、デジタル産業の発展に向けた取り組みも始まった。政府が情報統制のために始めた Facebook や Twitter には多数のプロパガンダ用アカウントが出現し、情報検閲は国内の政敵に悪のレッテルを貼る手段となった。政府は市民を弾圧しつつ自らの道徳的権威を主張し、情報操作によって多面的な事実の一側面のみを誇張し、周辺諸国に影響を与えようとする。これは、地域大国として覇権を狙うイランの国家戦略である。

イラン政府は情報戦で優勢を保つことを外交・内政の最重要課題とみなし、米国、イスラエル、サウジアラビア、そして国内で反対意見を唱える市民に対して、終わりのない情報戦に取り組む姿勢を見せている。デジタルコンテンツ推進に莫大な投資を行い、あらゆる国家機関にデジタル産業教育推進部門を設けている。一方、その状況は、高度なデジタル技術を有する多くの若者を生んだ。また、ソーシャルメディアは、プロパガンダのためだけでなく、信条、出自、性別の差異を超えた自由な議論の場としても活性化された。2009 年の「緑の運動」は、そのような機会を利用した若者による、大統領選挙の不正操作に対する抗議運動である。

緑の運動以降、検閲が強まり、2011 年にはサイバー警察 (Cyber Police) が、2012 年にはサイバー空間最高評議会 (Supreme Council of Cyberspace) が発足された。2019 年のガソリン価格高騰への抗議が SNS を通じて 100 以上の都市に拡大した際には、政府はインターネット接続を 90 時間遮断して抗議者を無力化し、国際的支援から孤立させた。しかし、検閲

や規制を回避する方法を模索してきた市民の間では、仮想プライベートネットワーク (VPN) やその他フィルタリング対策の技術が高度に発展していった。その結果、現在も国民の 7 割が日常的にインターネットを利用し、Instagram、Telegram、Facebook の他、Divar などイラン独自のビジネスアプリも人気である。2021 年の選挙の際は、音声ライブチャット用 SNS である Clubhouse で自由な議論が交わされた。また、2022 年のマフサ・アミーニーの死に際して、#MahsaAmini というハッシュタグが 8000 万人に拡散され、「女性、命、自由」(Zan-Zendegi-Azadi) という標語と共に、世界に抗議活動が広まった。若者による普遍的価値への要求が、国家が定める保守的価値に取って代わろうとしている。

国家と社会がサイバー空間に集うことで衝突を緩和した事例もある。2020 年のナゴルノ・カラバフ紛争の際、周辺国によりイランの領土保全が脅かされると、人々が急遽ソーシャルメディア上に集い、#Baku、#shervan、#Aran、#yasharsin Iran (トルコ語で「イラン万歳」) というハッシュタグを拡散した。特にイランのアゼリ人やクルド人が積極的に言論空間へ参入し、周辺国のナショナリストにカウンター・ナラティブを発信した点は重要である。これは、サイバー空間における市民の主体性が国際政治で主導権を握り得ることを示唆している。ソーシャルメディアの、あらゆる差異を越えた文化的な言説空間としての側面には、新時代に適した国際規範の形成基盤となることが期待される。

講演後は、中西久枝教授の司会のもと、4 名のコメンテーターから複数の論点や質問が提示された。また、同志社大学グローバル・スタディーズ研究科の大学院生をはじめとする会場の参加者と講師との間で質疑応答が行われた。国内外からオンラインおよび対面で計 38 名の参加があり、大変有意義な会となった。

なお、今回の国際会議は科学研究費基盤 A「ハイブリッド戦争時代における新たな安全保障学の構築：中東ユーラシア地域の事例から」(22H00051：中西久枝) の助成を受けて開催された。

(CISMOR 特別研究員 兼定愛)



左から、中西久枝氏、Seyed Ali Alavi 氏、アダ・タガー・コヘン氏



会場の様子

CISMOR ワークショップ

## CISMOR Young Scholars' Workshop 2022-2 (CISMOR 一神教学際研究会 2022-2)

主催：同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)

【発表者】 久保田昌弘 ほか 3 名 (詳細は本文参照)  
 【コメンテーター】 浅野淳博 ほか 3 名 (詳細は本文参照)  
 【日時】 2022 年 11 月 12 日 (土) 13:30-16:25  
 【会場】 Web 会議システム “Zoom” プラットフォーム

2022 年 11 月 12 日 (土)、2022 年度第 2 回目の CISMOR 一神教学際研究会 (CISMOR Young Scholars' Workshop) が開催された。本研究会の目的は、大学院生を中心とする若手研究者に発表の機会を提供し、主に当センターのリサーチフェローによるフィードバックを通して、若手研究者の育成を図るところにある。

新型コロナウイルスの流行が継続しているため、2020 年度、2021 年度に引き続き、研究会はオンラインにて実施された。今回の研究会では、学内外の大学院生計 4 名による発表が行われた。また、各発表の後には、コメンテーターから、詳細なコメントと、今後の研究の進展を見据えた建設的な助言が提示された。また、発表者とコメンテーターとの間で質疑応答も行われた。プログラムと各発表の概要は以下の通りである。

### 13:30-13:35

開会の挨拶：アダ・タガー・コヘン (同志社大学神学研究科教授 / CISMOR センター長)

### 13:35-14:15

発表①：久保田昌弘 (ルードヴィッヒ・マクシミリアン大学ミュンヘン福音主義学科博士課程) 「ルカ文書における悪魔論の問題点」  
 コメンテーター：浅野淳博 (関西学院大学神学部教授)

### 14:15-14:55

発表②：辻坂真也 (同志社大学神学研究科博士後期課程) 「王権の表象 ―古代メソポタミアを事例に―」  
 コメンテーター：柴田大輔 (筑波大学人文社会科学部教授)

### 14:55-15:00 休憩

### 15:00-15:40

発表③：山中弘次 (同志社大学神学研究科博士後期課程) 「坂田祐 (たすく) ―元騎兵隊小隊長が守り抜いたキ

リスト教主義教育 ―」  
 コメンテーター：塩野和夫 (西南学院大学国際文化学部教授)

### 15:40-16:20

発表④：何懿亨 (同志社大学神学研究科博士後期課程) 「『辨学章疏』における徐光啓の護教論に関する考察」  
 コメンテーター：城地孝 (同志社大学文学部准教授)

### 16:20-16:25

閉会の挨拶：アダ・タガー・コヘン

久保田昌弘氏は、ルカ文書における悪魔や悪霊の基本的な特徴や役割、存在意義およびそれらに対する救済論について論じた。はじめに久保田氏は、ルカ文書における悪魔論が基本的にどのように考えられてきたかという先行研究の紹介とそれに対する批判を提示し、ルカ文書における悪魔論の問題点を明らかにした。ルカ文書における未解決な問いや体系的な悪魔論の欠如は、単に検証不足という側面もあるが、もう一つ大きな問題があると久保田氏は考える。それは、ルカ文書の研究において、未だに終末の遅延のコンセプトが根強く残り、ルカ福音書や使徒言行録でのイエスや彼の追従者たちの活動の時間が「終末の時」ではないと考えられている点にある。そこで、特に第二神殿時代のユダヤ黙示文学において、悪魔論と終末論はどのような関連があるのか、または、悪魔論はどのような時間構造や時間理解に組み込まれているのかの検証が必要であるという見解を久保田氏は提出した。

辻坂真也氏は、古代メソポタミアにおける王権の象徴について発表した。古代メソポタミア、特に紀元前三千年紀末期のシュメール人の社会において、玉座は王権の象徴として用いられた。発表で辻坂氏は、玉座がメソポタミアにおいて王権の象徴に用いられるようになった背景および玉座が伝統的に持っていた機能や力、そして役割を、図像、及び文書史料の両方から再検討



し、次のような見解を提示した。第一に、初期王朝期において神の玉座は、神の威光によって、国境の正当性を主張し、それを破壊した他国に対して開戦する事由として用いられた。しかし、ウル第三王朝において玉座は、神殿の中に配置され、神と共に供物を受け取るという、神への崇拜の場として機能した。第二に、エジプト初期王朝時代における玉座は、王の治世のメタファーであったが、ウル第三王朝における玉座は全て、王の死後につくられている。したがって、ウル第三王朝における玉座は生前の王の治世ではなく、死後の王の供儀の場として機能していたと考えられる。また、歴代王の玉座が同じ場所に並べられていたことから、王朝の系譜を示すためのものであった可能性もある。いずれにせよ、アマルシン以降、同時代史料において拡大する玉座の重要性を確認でき、これらは彼らの王権の正当性を顕示するために用いられていたと辻坂氏は結論づけた。

山中弘次氏は、関東学院の創立者である坂田祐に関する発表を行った。発表で山中氏は、内村鑑三との子弟関係で生まれた坂田のキリスト教信仰と、苦境の中でも超然と貫かれたキリスト者としての戦いの姿勢を明らかにした。坂田祐は元会津藩士の貧しい家に育ち、陸軍に入隊後は騎兵隊小隊長として日露戦争で勲功を立てた。坂田は、キリスト教と内村鑑三への傾倒から戦場で非戦論者となった。帰還後は、人を殺す軍人より人を生かす教育者になりたいという思いから教育者になることを決意し、一高、東大で学んだ後に関東学院初代院長に就任した。坂田は、15年戦争期のキリスト教主義学校への圧力の下でも、終始、毅然としてキリスト教主義教育とそこで学ぶ学生を守り抜こうとした。戦時下の抵抗や戦いについての坂田の言葉は淡々として

悲壮感がないが、戦場での過酷な経験から獲得した神の国への絶対的な信頼と希望が、そのことを可能にしていたと山中氏は考察した。何度も部下と自身の生死をかけた状況をくぐり抜けながら、その戦場において信仰を育て、絶対的な希望にたどり着いた経験を持つ人は、極めて稀な存在であると山中氏は述べた。

何懿亭氏は、『辨学章疏（べんがくしょうそ）』における徐光啓の護教論について発表した。1616年、中国ではキリスト教弾圧事件（「南京教案」）が起きた。この事件に関して、明朝末期の中国知識人の徐光啓（1562-1633）は、皇帝への上奏書『辨学章疏』を書き、自分のカトリック信仰を表明したと同時に、キリスト教を弁護した。このことを踏まえて何氏は、『辨学章疏』の内容の解説と分析を通じて、この上奏書における徐光啓の護教論を考察しながら、明朝末期の中国人改宗者によるキリスト教理解を明らかにし、次のように結論づけた。第一に、徐光啓はキリスト教を弁護する上で、その教義の道徳的な役割を認めた。また、彼はキリスト教の社会的役割を肯定し、キリスト教の社会的実践による儒教の補足や社会秩序の改善を期待した。さらに、彼は宣教師たちを弁護し、彼らへの同情と信頼を示した。徐光啓が『辨学章疏』でこのような記述をしたことによって、明朝末期の中国人改宗者たちはキリスト教の教義に対して一定の認識を持ち、正当な宗教としてのキリスト教の姿を示しながら、キリスト教への熱意や敬虔さを示すこととなったと何氏は結論づけた。

以上のように、今回も多岐にわたる内容の研究発表が行われた。4名の若手研究者の今後の活躍が期待される。

(CISMOR 特別研究員 鍵谷秀之)

CISMOR リサーチフェロー研究会（イスラーム研究部門）

## Changes in Halal Identity Management: Stricter Halal Standards and Diversity in the Age of Globalization

主催： 日本学術振興会（JSPS）科学研究費基盤研究 B 「グローバル時代におけるハラール基準の標準化と多様性の動態」（22H03846：大形里美）  
共催： 同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）

【発表者】 Nadrattuzaman Hosen ほか 2 名（詳細は本文参照）  
【コメンテーター】 Syafiq Hasyim (Universitas Islam Internasional Indonesia)  
【日時】 2022 年 11 月 19 日（土）14:00-17:35  
【会場】 同志社大学烏丸キャンパス志高館 1 階会議室／Web 会議システム “Zoom”

2022 年 11 月 19 日（土），“Changes in Halal Identity Management: Stricter Halal Standards and Diversity in the Age of Globalization”（ハラール・アイデンティティ・マネジメントの変遷：グローバル化時代のハラール基準の厳格化と多様性）が対面とオンラインのハイブリッド形式で開催された。標記の科学研究費・基盤研究 B のプロジェクトの第 1 回目の国際会議であり、発表者 3 名とコメンテーター 1 名によって、東南アジア地域を中心にハラール基準に関する現状や問題点が議論された。それぞれ 30 分の発表ののちに、10 分の質疑応答の時間が設けられた。司会進行は CISMOR リサーチフェローで同志社大学法学部嘱託講師の西直美が担当した。プログラムおよび発表の概要は以下の通りである。

### 14:00-14:20

開会の挨拶・アダ・タガー・コヘン（同志社大学神学研究科教授・CISMOR センター長）、趣旨説明・大形里美（九州国際大学ビジネス学部教授）

### 14:20-15:00

Dr. Nadrattuzaman Hosen (UIN Syarif Hidayatullah) “Halal Standards in Muslim Minority Countries; Audit Experience”

### 15:00-15:40

Dr. Rosmiza Bidin (Universiti Putra Malaysia) “Halal Identity Management in Malaysia; The Change and its Background”

### 15:40-16:20

Dr. Smeet E-sore (Kirkirk university) “Halal Standard in Thailand”

### 16:30-16:50

Discussion by Dr. Syafiq Hasyim (Universitas Islam Internasional Indonesia)

### 16:50-17:30 General Discussion

インドネシアのハラール認証を 2019 年まで担っていた LPPOMMUI（インドネシア・ウラマー評議会食品・医薬品・化粧品研究所）の代表や世界ハラール評議会会長を務めた経験のある Nadrattuzaman Hosen 氏は、豊富な実

務経験をもとに、ハラールをめぐる伝統法学の解釈から、ハラール認証に関連する技術的な問題に至るまでを論じた。ハラールはイスラーム法学上の用語であり、ナジス（不浄なもの）が含まれているか否かという点が重要になる。イスラームにおいてクルアーンに示された禁止事項を除き原則すべてがハラールであるということが確認されたのち、ハラール認証の監査・評価の場面でしばしば問題となってきたこととして、血液が体外に完全に排出されない可能性がある喉を切断する前のスタニング、ハムル（通常は「酒」を指す）の解釈、ポーク・フレーバー、微生物や酵素、添加物を用いた製品、製造ラインの分離や浄化の方法が挙げられた。Nadrattuzaman 氏は、ハラールをめぐる問題では、ムスリムと非ムスリムとのコミュニケーションのみならず、イスラーム法学と科学・テクノロジーとの間のコミュニケーションが重要であることを指摘した。

Rosmiza Bidin 氏は、中小企業の企業アイデンティティやブランド・マネジメントに注目した議論を行った。企業イメージにおいてハラールが重視されるようになり、ハラールはいまやグローバル化したアイデンティティとなっていることから、ダアワ（布教）の観点だけでは十分とはいえない。Rosmiza 氏は、ムスリムだけでなく、非ムスリムにとっても意味のあるコミュニケーションを実現するという意味でビジネスの観点の重要性を強調する。ハラール・ハブを目指すマレーシアであるが、中小企業のハラール認証の取得状況は依然として低調である。しかし中小企業にとって強固な企業アイデンティティを確立することは、経営にポジティブな影響を与えるものでもある。そのための効果的なコミュニケーションの制度として、ハラール・アイデンティティ・マネジメントがもつ可能性を積極的に評価した。

Smeet E-sore 氏は、仏教徒が多数派を占めるタイにおけるハラール認証制度やプロセスの全体像について発表を行った。タイでは、イスラームに関わる事項につ



いてはムスリムの自治に委ねられており、ハラール認証は CICOT（イスラーム中央委員会）のもと、HSIT（ハラール基準研究所）、チューロンコン大学のHSC（ハラール科学センター）との協力関係に基づいて実施されている。タイでは CICOT が唯一ハラール認証とハラール・ロゴの発行の権限を持ち、CICOT および県イスラーム委員会が発行するハラール認証と、CICOT のみが発行するハラール・ロゴが分かれている。原料・素材のように最終製品でない場合、ハラール・ロゴの申請を行わず認証のみを申請する企業も多い。ハラールをめぐる食品のみならず観光への注目が集まるなか、政府による支援も強化されてきた。しかし、申請にかかる時間やコスト、知識、人材不足などが課題となっていることが示された。

三人の発表に対して、Syafiq Hasyim 氏からは、ハラール認証における最終製品重視かプロセス重視かという論点、国家とハラール認証組織、テクノロジーとハラール、ムスリム多数派国における非ムスリムへの影響という論点が提示された。東南アジアに多いシャーフイー学派は、原料までさかのぼってハラールか否かを判断するのに対して、中東に多くみられるハナフィー学派では最終製品に特化した判断が行われており、東南アジアでもマレーシアやインドネシアのように厳格なハラール基準を導入する国もあれば、最終製品主義を採用するシンガポールのような国もある。インドネシアでは MUI（インドネシア・ウラマー評議会）によるハラールをめぐるファトワー（イスラーム法裁定）の独占やファトワーが大企業に有利な内容になっていることが問題視されていること、テクノロジーの発展、とりわけ DNA 検査技術の進歩によって伝統法学上は問題とならなかった点が問題化され、結果、厳格な基準が求められるようになってきていること、ハラール認証の法制化は国内の非ムスリムの反発を受けていることなどが指摘された。

コメンテーターによって上記の論点が提示されたあと、フロアを含めたディスカッションでは、認証機関や認証制度、ハラール基準の統一、ムスリム少数派国におけるハラール認証の問題が話し合われた。タイでは CICOT による一元的な

ハラール認証が行われている一方で、人材不足やコストが問題となっている。インドネシアでは MUI が行っていたハラール認証を、2019 年以降は宗教省下の BPJPH（ハラール製品保証実施機構）が担うようになったことで混乱が生じた。また、マレーシアで宗教に関する事項に一義的な責任を負う各州の法律や手続きの複雑さが中小企業にとってハラール認証取得の妨げとなっている。

ハラール基準に関しては、1997 年に国連がハラールの基本ガイドラインを出しているものの、各国が独自にイスラーム格と科学的な根拠のもとに詳細かつ厳格な基準を定めてきた。ハラール基準の厳格化は、テクノロジーの進歩を背景に他国の製品との差異化を意識して積極的に推進される傾向がある。ハラールとはイスラーム法上の解釈の問題であり、法学派やウラマーによっても意見の違いが存在することを踏まえて、より厳格なハラール基準へ統一しようとするムスリム諸国の流れに対する疑問も提起された。こうした意見に対して、イスラーム法上多様性を認めるという点に問題が起これないとしても、貿易上は問題が生じうることも指摘された。例えば製品に当該国家のハラール・ロゴをつける必要がある場合、輸出を望む企業にとって負担になりうる。

日本のようなムスリム少数派国では、そもそも厳格なハラール基準を導入すること自体に困難がともなう。日本においては、ハラールの問題は日本人によって惹起されているというより、日本を訪れる一般のムスリムの知識や認識不足に起因する場合があることも指摘された。ムスリム多数派国が主導するハラール基準厳格化がムスリム少数派国のハラール・サービスを阻害するなど、ネガティブな影響をもたらしていることについて指摘があり、今後はムスリム少数派国における現状への配慮が必要だとの見解も示された。ハラールという法学的な議論を惹起する言葉を用いるべきなのか、公的な認証という形式で実施すべきなのかなど、ムスリム少数派国におけるハラール基準やサービスのあり方をめぐっては課題が山積している。

(CISMOR リサーチフェロー 西直美)

CISMOR ワークショップ

## The Return of the Absent Father: A New Reading of a Chain of Stories from the Babylonian Talmud

主催：同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）

【講師】 Haim Weiss（ネゲヴ・ベン＝グリオン大学ヘブライ文学部教授）  
Shira Stav（ネゲヴ・ベン＝グリオン大学ヘブライ文学部上級講師）  
【日時】 2022年12月4日（日）16:00-17:30  
【会場】 Web会議システム“Zoom”プラットフォーム



Haim Weiss 氏

2022年12月4日（日）、CISMOR ワークショップ“The Return of the Absent Father: A New Reading of a Chain of Stories from the Babylonian Talmud”（不在の父の帰還：バビロニア・タルムードにおける一連の物語を新たに読み解く）が、Web会議システムを用いて開催された。講師は Haim Weiss 氏と Shira Stav 氏である。講演は両氏がヘブライ語と英語版で出版した書籍の内容に基づいて行われ、バビロニア・タルムードの文書ケトウボットにおける七つの物語の新たな解釈が提示された。

バビロニア・タルムードは、3世紀から5世紀にかけてメソポタミアで作られ、5世紀から6世紀にかけて編集された書であり、ユダヤ教の伝統の中で聖書に次いで最も研究されている。タルムードには、それ以前のミシュナー解釈、聖書物語の書き換え、法的議論、賢者やその同時代人々に関する物語が含まれている。講演では、ある賢者が家庭や妻や家族を捨てて、数週間から数年間、学び舎に赴くという、ケトウボットに出てくる七つの物語が取り上げられた。これらの物語は、律法に憧れる学者としての人生と、家族に積極的かつ継続的には関わらない夫や父としての人生という、賢者がもつ両側面のせめぎ合いを露わにしている。

聖人の知的欲求を満たすために重要な「バート・ミドラーシュ」、つまり、研究や議論、学習、思考の場と、「家庭」という家事、食事、子育ての場。Stav 氏は、これら相反する二つの場の緊張関係について詳述した。七つの物語は、別れと帰還の瞬間を中心に展開し、二つの場における緊張感がクライマックスを迎える劇的な結末となっている。多くの学者がこれらの物語を解釈し、夫婦間の欲求と学問的欲求の間の緊張がこれらの物語の重要な原動力であると強調してきた。しかし、この物語では、家族構成における父親の役割という、さらなる意味の層を明らかにすることも可能である。賢者は、母親とともに残された子どもたちの生活において、行方不明の父親であったり、息子や娘、婿へ何らかの要求をすることで複雑な役割を果たしたりと、それぞれの物語によってその姿を変える。しかし、父親としての賢者の立場が際立っている点は、各物語において一貫している。ラビ文学において、父親は文化、精神、知識の生活の唯一の代表者である。また、

家父長制の家庭において母親は、子供を育て、世話する存在である。父親が家庭内で実際にどのような役割を果たしていたのかということについては、文献にもほとんど記されておらず未知数である。これらの物語のつながりから、家庭における父親の機能、特に息子と娘という家族に対する機能を垣間見ることができる。ジークムント・フロイトやジャック・ラカンらの理論においても示唆されているように、ある意味で、この父親は最も存在感があり、同時に、最も不在でもある。

続いて Weiss 氏は、七つの物語のうち四つ目、ハキナイの子ラビ・ハナニアとその妻と娘の物語について説明した。この物語において、賢者は結婚を控えた友人を待たずに別の町へと学びに行ってしまった。そして、12年ぶりに帰国した彼は、故郷が分からなくなり、家も見つけれなくなってしまっていた。彼は、川から水を汲んでくる少女たちを見て、一人の少女が「ハキナイの娘」と呼ばれているのを聞き、自分の娘に違いないと考え、家までついていった。そして、彼の姿を突然見た驚きで妻は死んでしまうが、彼が慈悲を祈ると妻は蘇る。この一見単純な物語において、主人公が予想外の行動を取るという点について、Weiss 氏はさまざまな角度から考察を加えた。主人公は、自分の娘か妹かもわからない少女に対し、自己紹介するところから徐々に再会するのではなく、ただ少女の後を追う、突然の再会によって妻にショックを与えるのである。そこで父親は、自分の行為によって生じた問題を解決するために、神の慈悲に頼らざるを得なくなる。これらの物語に登場する不在の父親の帰還は、決して平穏なものではなく、常に複雑で、混乱をまねくものである。

父親は律法の研究に専念しているにもかかわらず、家族に対する義務を果たせていないことへの批判がこれらの物語には含まれているのではないかと Stav 氏は指摘した。また、これらの物語は、一方で、学問への情熱の代償を誰が支払うのかについて語っており、他方で、賢者や妻の理想的な姿を掲げるものでもあると Weiss 氏は述べた。講演後には、活発な議論が行われた。

（CISMOR リサーチフェロー ドロン・B・コヘン、  
編訳：CISMOR 特別研究員 鍵谷秀之）



Shira Stav 氏

## 『ギルガメシュ叙事詩』とは何か

主催： 同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)

【講師】 渡辺和子 (東洋英和女学院大学名誉教授 / CISMOR リサーチフェロー)

【日時】 2022年12月10日(土) 13:00-14:30

【会場】 Web会議システム“Zoom”プラットフォーム

2022年12月10日(土)、CISMORは渡辺和子氏(東洋英和女学院大学名誉教授 / CISMOR リサーチフェロー)を講師として公開講演会『ギルガメシュ叙事詩』とは何かを開催した。講演で渡辺氏は、『ギルガメシュ叙事詩』の背景や目的、物語の構成などを紹介するとともに、『ギルガメシュ叙事詩』が人間の生と死の問題に正面から向き合った作品であり、現代に生きるわれわれにとっても極めて意義深い物語であることを説明した。

渡辺氏は、「叙事詩」や「神話」といった用語について論ずることから講演を開始した。『ギルガメシュ叙事詩』が現代の研究者によって「叙事詩」とされた理由は、紀元前2600年頃にメソポタミア南部の都市ウルクに実在したと想定されたギルガメシュという王が、その後間もなく英雄視され、その事績が叙述された作品と見なされたからであるが、ギルガメシュの存在は疑問視される。また、『ギルガメシュ叙事詩』は神話とされるが、神話の意味は固定されていない。ある時に信じられていた神話も、荒唐無稽なものとして信じられなくなったり、また神話として回復したりする。しかし神話の核となる要素は生き続けるのであり、特に生と死に対する根源的な答えを人間は必要とするために、古来の神話に多様な形で含まれている。そこで渡辺氏は神話を「時空を超えて人間に強い影響力をもつ可能性を秘めた物語」として捉える。

続いて、『ギルガメシュ叙事詩』の伝承と創作に関する説明がなされた。アッカド語の『ギルガメシュ叙事詩』は、紀元前18世紀頃に創作(OB版)され、紀元前12世紀に改訂版(SB版)が編集された。OB版の作成時期には、シュメール語で書かれたいくつかのギルガメシュに関する物語の「手写」も作成されていた。それらがアッカド語版に部分的に「採用」されたと考えられるが、シュメール語の物語がどれほど古い起原をもつかは不明である。アッカド語版の主人公ギルガメシュは、3分の2は神、3分の1は人間という架空の人物であり、超人的な体躯と体力を持っていたとされる。そして、民を苦しめる少年王ギルガメシュを制する目的で、神々によって荒野に創造されたのが、野人エンキドゥである。ギルガメシュが問題児(または暴君)であったという点が冒頭で述べられており、全編を通して、その展開を追うことが重要

となる。ギルガメシュの暴君ぶりを聞いたエンキドゥは怒り、ギルガメシュに会った瞬間に襲いかかった。取っ組み合いの結果、彼らは同等の体力を持つ相手とはじめて出会った喜びで抱き合い、唯一無二の親友となった。そしてギルガメシュは、生きていた間に自身の名声を確立するため、森を守る精霊フンババの討伐をエンキドゥに持ちかけた。エンキドゥは反対したが、最終的にはギルガメシュと協力してフンババの首をとった。その後も両者は協力して天の牛を討伐している。しかし精霊フンババと天の牛を殺した罰として、神々はエンキドゥを病死させた。親友であるエンキドゥの死はギルガメシュを深く悲しませ、死への恐れをいっそう強くした。そこでギルガメシュは、永遠の命を与えられて神となっていたウータ・ナピシュティーに会いに行くが、そこでギルガメシュは、死は不可避と観念して受け入れることができた。

興味深いことに、物語の最後の6行は、序文の中にも書かれている。当時の伝統において、書板の最後の行は、次に読むべき箇所を示している。つまり、物語の第11書板の最後に書かれた6行は、「物語冒頭に戻って読み返せ」という指示と読み取ることができる。そして、物語の冒頭(第1書板)には、ギルガメシュが「知恵のすべて」を得たと書かれている。ここから、ウータ・ナピシュティーの「メント・モリ」の教えのあるように、「自分が必ず死ぬことを忘れてはならない」、それにもかかわらず充実した日常生活が送れることこそが知恵であると解釈できる。はじめは問題児であったギルガメシュが、エンキドゥとの冒険とその後の一人旅を通してこの知恵に到達した。エンキドゥは、ギルガメシュの変容のため犠牲になったとも言える。ギルガメシュは武勇に優れた「英雄」となったのではなく、エンキドゥの死を悲しみ続け、死の恐怖と正面から向き合い続けた後に、ジョセフ・キャンベルが英雄とは「普遍妥当性をもった人間の規範的なありよう」を獲得した者であると主張するように、そのような意味でギルガメシュは英雄となったと言える。

講演会には約50名の方々が参加し、活発な質疑応答が行われた。

(CISMOR 特別研究員 鍵谷秀之)



渡辺和子氏

CISMOR リサーチフェロー研究会（ユダヤ学研究部門）

## 第6回「シオン／エルサレム／聖地」観の再検討： 聖書テキストから今日に至るまで

主催： 同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）

- 【企画者】 石黒安里（同志社大学アメリカ研究所助教／CISMOR リサーチフェロー）  
平岡光太郎（同志社大学神学部嘱託講師／CISMOR リサーチフェロー）  
【発表者】 Zeev Harvey（Professor, The Hebrew University of Jerusalem）  
【日時】 2022年12月18日（日）16:00-17:30  
【会場】 Web 会議システム“Zoom”プラットフォーム



Zeev Harvey 氏

2022年12月18日（日）、「シオン／エルサレム／聖地」観の再検討—聖書テキストから今日に至るまで—の第6回研究会が、Web 会議システム（Zoom）上にて実施された。当日は、国内の各地から16名が参加した。第6回目となる今回は、エルサレムに在住の Zeev Harvey 教授により“Jerusalem in Midrash and Jewish Philosophy”（ミドラシュとユダヤ哲学におけるエルサレム）の題目で報告がなされ、エルサレムについての解釈の多様性、特に天上と地上のエルサレムについて議論を深める機会となった。

聖書には「神の住まい」に関する言及があり、それは奇跡によってイスラエルの民が紅海を渡ったのち、神への感謝を歌う際に現れる。「あなたは彼らを導き、嗣業の山に植えられる。主よ、それはあなたの住まいとして自ら造られた所、主よ、御手によって建てられた聖所です」（出エジプト記15章17節）。そもそもこの「住まい」とは何か。神に「住まい」は必要なのか。出エジプト記25章8節には、「私のために聖なる所を彼らに造らせなさい。私は彼らの中に住むであろう」とあり、神が住むのは「その聖なる所」ではなく、「彼らの中」とある。このように聖書の不明瞭な問題に、「ミドラシュ」（1～10世紀頃に紡がれた聖書解釈伝承）の一つである『メヒルタ』（Shirata 10）は答えようとする。それによると、「住まい」とされるヘブライ語の単語は「向けられる」という単語であり、「地上の神殿は天上の王座へと向けられる」となる。つまり、神殿は神が住む場所ではなく、それが天上の王座へと向けられていることから、神とのつながりを人に与える場所となる。

創世記28章には、天まで達する階段を天使たちが上り下りする様子を夢見たヤコブに関する記述があり、ヤコブは目覚めた場所を「これはまさしく神の家である。そうだ、ここは天の門だ」（17節）と呼んでいる。聖書はこの場所をベテルとしており、ユダヤ教師であるラビたちもそのことを理解しているが、ヤコブが夢を見た場所はモリヤの山の「その場所」、つまり、エルサレムでもあったと理解する。この場所から祈りは天に届き、地上の神殿は天上の神殿に向けられているということがラビたちによって語られる。このヤコブの階段は地上のエルサレムと天上のエルサレムの直接的な関係を表しており、11世紀のユダヤ思想家であるユダ・ハレヴィは、「あなたを創ったお方は、天の門へと向かうあなたの門を開いた」という、地上のエルサレムについての詩を綴っている。13世紀の聖書注解者であるナフマニデスも創世記28章

の注解において、「エルサレムで祈るあらゆる者は栄光の王座の前で祈るようなものであり、天の門はイスラエルの祈りを聞くために開かれている」と記し、エルサレムの聖性が神との直接的なつながりをもたらし、主張した。このような天上の門への祈りにエルサレムが最適であるという理解はラシを含める多くの聖書注解者たちに共有されており、現代において世界各地にある多くのシナゴグ（ユダヤ教教会堂）が「天の門」という名を冠するのは、上記のミドラシュや聖書注解に依拠しているからである。しかし、15世紀の政治思想家であったイツハク・アバルヴァネルは上記のようなナフマニデスの見解には賛同しない。アバルヴァネルは、「この場所が特に神の家とされるのは、それが天の門であり、天上からの神的流出を迎える準備があるからだ」として、地上から天上へ昇るのではなく、天から降ってくるという点に着目した。18世紀の啓蒙思想家であったモーゼス・メンデルスゾーンもアバルヴァネルに近い立場を取り、それによるとエルサレムは天からの預言が降る場所なのである。

聖書のホセア書11章には「わたしは神であり、人間ではない。お前たちのうちであって聖なる者。その都には入らない（新共同訳：怒りをもって臨みはしない）」とあり、タルムードのタアニート篇5aは、神が地上のエルサレムに入る前に、天上のエルサレムに入ることはないと理解する。聖書注解者のラシはこの箇所を、天上のエルサレムは地上のエルサレムのモデルであると説明する。これはプラトンのイデア論にも通じるものがあり、その場合、天上のエルサレムはイデア界の理念であり、地上のエルサレムはその影に過ぎないのである。しかし、このタルムードの理解では神はまず地上のエルサレムに入ることであり、天上のエルサレムは地上のエルサレムから独立してはいないのである。このため、このホセア書の注解は反プラトニックな見解と見做すこともできる。ユダヤ哲学者のマイモニデスの影響を大きく受けたイブン・ティボンも、この箇所から倫理的で政治的な身体の完成の基盤に、永遠の生命である霊的な完成がもたらされると考えた。20世紀の思想家であるマルティン・ブーバーもこの箇所を依拠しつつ、彼の対話的思想を展開した。ブーバーによると地上のエルサレムであるシオンにおいて人々のあいだに社会正義が実現しない限り、またイスラエルがその隣人と和平に至らない状況において神は天上のエルサレムへ入城せず、神はその時を待っているのである。

（CISMOR リサーチフェロー 平岡光太郎）



## Purity Laws in Contexts: From the Ancient World to Modern Times

共同主催： The Institution of Korean Theological Information Network Service (IKTINOS)、同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)

【企画者】 A. T. Cohen, Jungwoo Kim, Hannah S. An, Dongsoo Kim, Tetsu Kitamura  
【発表者】 Ada Taggar Cohen ほか 7 名 (詳細は本文参照)  
【日時】 2023 年 1 月 14 日 (土) 10:30-16:10  
【会場】 Web 会議システム “Zoom” プラットフォーム

2023 年 1 月 14 日 (土)、CISMOR と IKTINOS による国際ワークショップ “Purity Laws in Contexts: From the Ancient World to Modern Times” が開催された。IKTINOS は韓国における神学データベースの公共プラットフォームとして、1995 年以来、約 120 年分に及ぶ韓国の神学文献の抄録を目録化している (<https://www.canonculture.com>)。

開会の挨拶は、月本昭男氏 (公益財団法人古代オリエント博物館館長) によってなされた。月本氏は、約 25 年前にウクライナを訪問された際、若い時に近隣の国々に友人を持つことの大切さを学ばれたご経験から、日韓の関係においても温かく個人的な友人関係を築いていくことの重要性について述べられた。また、独仏英の 3 カ国語が自由に用いられた第 26 回 Rencontre Assyriologique (1979 年、於コペンハーゲン) へのご参加以来、北東アジアにおいて研究者の交流が日韓中の 3 カ国語でなされる日が到来する夢を抱いてきたと語られた。プログラムは以下の通りであった。

### 10:30-10:45 Message of Greeting

Prof. Dr. Akio Tsukimoto

### 10:45-12:15 SESSION I: Ancient Near East and Hebrew Bible/Old Testament

“Between Cleanliness and Purity in Hittite and Biblical Cultic Rituals”

Prof. Ada Taggar Cohen (Graduate School of Theology, Doshisha University, Kyoto)

“Impurity and Purification: The Understanding and Response to the Exile in the Book of Ezekiel”

Dr. Tetsu Kitamura (Doshisha University, Kyoto)

“Water Imagery in the Book of Ezekiel:

Ritual and Moral Implications”

Assoc. Prof. Hannah S. An (Torch Trinity Graduate University, Seoul)

### 13:15-14:15 SESSION II: Second Temple Period

“Divine Law and ‘Natural Law’ in Second Temple Judaism and the Acceptance of Gentiles in Early Christianity”

Assoc. Prof. Kaori Ozawa (Kobe College, Nishinomiya)

“Purity and Eschatology of the Dead Sea Scrolls”

Prof. Yoon Kyung Lee (Ewha Womans University, Seoul)

### 14:20-15:50 SESSION III: New Testament

“Baptism in Early Christian Groups: Its Adoption, Transformation and Development”

Prof. Jayhoon Yang (Hyupsung University, Hwaseong)

“Cleansed by Jesus’ Word: Beyond the Baptism by Water in the Gospel of John”

Assoc. Prof. Yutaka Maekawa (Kwansei Gakuin University, Sanda)

“Covenantal Holiness: From Imitatio Dei to Imitatio Christi”

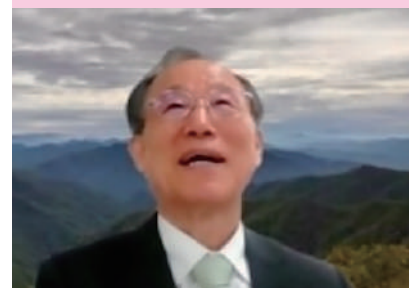
Asst. Prof. Sookgoo Shin (Torch Trinity Graduate University, Seoul)

日韓それぞれ 4 名の発表後、35 名の参加者による活発な質疑応答が続いた。CISMOR と IKTINOS の学術提携の進展により、日韓の聖書研究の交流が、そして月本氏が希望を示されたように、その交流が台湾や香港、中国にも広がっていくことが期待される。

(CISMOR リサーチフェロー 北村徹)



Prof. Ada Taggar Cohen



Prof. Jungwoo Kim



Assoc. Prof. Hannah S. An



Prof. Dongsoo Kim



Dr. Tetsu Kitamura

公開講演会

## イランの抗議デモにみる中東ユーラシアの地政学： ウクライナ戦争の影響

主催：同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）

共催：日本学術振興会（JSPS）科学研究費基盤 A「ハイブリッド戦争時代における新たな安全保障学の構築：中東ユーラシア地域の事例から」（22H00051：中西久枝）

【講師】中西久枝（同志社大学グローバル・スタディーズ研究科教授／CISMOR 幹事）

【日時】2023年1月15日（日）13:00-14:00

【会場】Web 会議システム“Zoom”プラットフォーム

2023年1月15日（日）、CISMOR 主催の公開講演会「イランの抗議デモにみる中東ユーラシアの地政学：ウクライナ戦争の影響」が開催された。講師は、イスラーム世界の女性を取り巻く社会環境とイランを取り巻く中東の安全保障問題を専門とする中西久枝氏である。

今回の講演で中西氏は、2022年に始まったイランにおける抗議デモの意義について、ウクライナ戦争が中東ユーラシアにもたらした影響やイランと近隣諸国との関係に触れつつ考察し、中東ユーラシアの地政学的変化について今後の展望を述べた。概要は次のとおりである。

ウクライナ戦争開始から6か月半が経過した2022年9月、イランでクルド人女性が拘束され死亡した事件を契機に抗議デモが始まった（詳細は岩波書店の『世界』2022年12月号を参照）。そして2023年1月現在まで、国内的・国際的要因が絡み合い、デモは継続している。今回の抗議デモの発生と継続について考える際、イランと近隣諸国との関係の変化に着目する地政学的観点がある。

ウクライナ戦争下で、イラン・アメリカ・ロシア関係、および、イラン・イラク・トルコ関係に変化が生じた。イランが親ロシア政策を取ると、イラン・アメリカ関係は悪化し、強まる経済制裁の中、生活に困窮した人々の不満が高まった。また、イランの人々の多くがウクライナを支持しており、その意味でも自国政府に不満を抱いている。そして、外交・内政両面で窮地に立たされたイラン政府は核開発を進めており、欧米から「2023年の中東最大の脅威」とみなされた。

また、抗議デモの開始時期や内容から、背景にイラン、イラク、トルコ、シリアにまたがるクルド人問題があることがわかる。イランでは、クルド人居住地域でのデモ鎮圧強化に対する人々の反発が全土に広がった。クルド人の政治的・経済的権利は多数派（ペルシャ人、アゼルバイジャン人）に比べて限定的で、過去にも中央政権が弱体化するとクルド人による抗議活動が起きている。今回のデモ開始後は、イランの革命防衛隊がイラクの一部勢力と協力し、イラク北部のクルド人勢力への攻撃を開始した。

また、ウクライナ戦争下の中東で唯一ロシアとの対話外交が可能で、NATO 加盟国

でもあるトルコは、北欧2か国が加盟を求めた際、自国に望ましい形でのPKK（クルディスタン労働者党）掃討作戦を条件とし、欧米諸国への影響力を高めた。また、トルコがクルド人武装勢力に対してシリアやイラクへの侵入を含む掃討作戦を展開する中で、イラン政府と関係を強めていたクルド人勢力も排除された。これにより、イラン・トルコ関係は悪化し、各国にまたがるクルド人勢力の分裂・断片化を加速させる要因となった。

地政学的重要性が高まるアゼルバイジャンとイランとの関係も悪化している。イランにはアゼルバイジャン共和国内の2倍以上のアゼルバイジャン人が居住しているが、アゼルバイジャン政府は長年親トルコ、親イスラエル政策を取ってきた。そして、2020年10～11月の第二次ナゴルノ・カラバフ戦争でアゼルバイジャンがアルメニアに対して圧倒的な勝利を収めた背景には、トルコとイスラエルによる軍事支援がある。このような、アゼルバイジャンとトルコ・イスラエル両国との接近はイランにとって深刻な脅威である。

以上のようなイランと近隣諸国との関係悪化は、中東ユーラシアにおける紛争の火種の増加を示唆している。その中でイランは核開発を進め、それが地域安全保障上の更なる問題になるという悪循環がある。また、事実上トルコの影響力が強いシリア北東部や、フセイン政権崩壊後に統治能力を高めているイラク北部のクルディスタンなど、未承認国家的な地域は増えるであろう。これは、コーカサス地域において、アルメニアの支配下にあったカラバフが国際法上アゼルバイジャンの領域として認められつつあることと対照的である。

講演後には、42名の参加者との間で質疑応答が行われた。経済制裁下のイランにおける技術革新、イラン政府にとってのイラン人女性のヘジャブ着用の意義、イランの核開発の今後の計画、和平調停におけるトルコの役割などに関する質問への回答がなされ、大変充実した講演会となった。

なお、今回の国際会議は科学研究費基盤 A「ハイブリッド戦争時代における新たな安全保障学の構築：中東ユーラシア地域の事例から」（22H00051：中西久枝）の助成を受けて開催された。

（CISMOR 特別研究員 兼定愛）



中西久枝氏

## 〈神学する〉とは何かー性差別と運動の批判的継承ー

主催：同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)

- 【企画者】 藤原佐和子 (立教大学文学部兼任講師／CISMOR リサーチフェロー)  
朝香知己 (同志社大学神学部嘱託講師／CISMOR リサーチフェロー)  
【講師】 堀江有里 (関西学院大学社会学部ほか非常勤講師／  
日本基督教団京都教区巡回教師)  
【日時】 2023年2月18日(土) 15:00-17:00  
【会場】 Web 会議システム “Zoom” プラットフォーム

2023年2月18日(土)、CISMOR リサーチフェロー研究会 (キリスト教研究部門) が、堀江有里氏 (関西学院大学社会学部ほか非常勤講師、日本基督教団京都教区巡回教師) を講師に迎え、オンラインにて開催された。堀江氏は、これまでの自身の経験から「神学」と「実践 (運動)」のかかわりと、その意義について論じた。

1980年代後半から1990年代初頭にかけて、同志社大学神学部では〈神学する〉(doing theology) という言葉がしばしば語られたが、ここには二つの背景があった。まず、「文脈化の神学」のなかでも社会変革モデルの方法論が隆盛していたことである。たとえば、解放の神学(中南米)から民衆の神学(韓国)、闘争の神学(フィリピン)、黒人の神学(米国)、物語の神学(台湾)など西洋中心主義・白人中産階級を出自とする神学のあり方への問いが邦訳されていった時期でもあった。次に、牧師養成としてフィールドワークの重要視があった。地域と教会の連携が強調され、神学を抽象的にとらえるのではなく、「現場」と結びついていくことの必要性がしばしば唱えられた。

このような〈神学する〉ことの強調は、「現場」とは何かという問いも抱えていた。たとえば自身が修士課程で歴史神学を専攻した際(研究課題「新島襄の教会観」)、指導教授であった土肥昭夫氏は、歴史の出来事がどのように〈いま・ここ〉と連関しているのかを検証する視点をも重視した(『歴史の証言』教文館、2004年)。土肥氏は、後の教団状況の中、情勢が良くなくとも発言し、「議事録に残していく」ことの意義をゼミ出身者たちとの対話で何度も述べた。その理由は「誰かが100年後に読むかもしれないから」であり、これは歴史神学者らしい言葉であると感じる。

時は流れ、昨今、あるテーマが“賞味期限つき”神学とラベリングされた事例を耳にした。“賞味期限のない”神学とは何か、“普遍的な神学”とは何か。繰り返されてきた問いではあるが、その際、欧米中心主義のバイアスが不可視化される傾向にあるといえる。それ

はいまに始まったことではなく、自身が学んだ20年後に神学部で在学した榎本空氏も、近著で「神学とは、神についての普遍的で客観的な言語であるから、特定の時代状況への応答と参与を旨とする黒人神学は、あまりに時流的で情緒的、普遍性や汎用性に乏しく、また主観的、ということだったのだろう」と神学部での日々を振り返っている(『それで君の声はどこにあるんだ?』岩波書店、2022年)。

人間存在の息遣いを“賞味期限つき”と称してしまうことは、被造物としての〈いのち〉を軽視あるいは否定する身振りである。日本基督教団史でもその議論は繰り返されてきた。とくに1960年代後半からの大阪万博問題以降の「闘争」の時代において蓄積されてきたものでもある。しかしそれらの蓄積も1980年代には性差別問題の視点を著しく欠いたものであるとの批判がなされてきた。そこでは性差別問題特別委員会の設置、戦後補償問題や同性愛者差別問題への取組などが女性信徒たちを中心になされてきたが、現状ではそのような活動や議論の蓄積は忘却されつつもある。

堀江氏は最後に、わたしたちが膨大にある蓄積をどのように読み、何を継承していくべきか、また、〈神学する〉ことは大学やアカデミアだけのものではなく、必要に応じてオルタナティブな場づくりのなかでも継承と議論の可能性を切り拓いていくことができるのではないかと指摘し、講演を締めくくった。

講演後は、コメンテーターの朝香知己氏(同志社大学神学部嘱託講師、CISMOR リサーチフェロー)より、「神学」と「実践」をめぐって両者の乖離が語られる際にしばしば見られる、両者が無関係であるかのような想定について、その問題点の指摘がなされた後、参加者による質疑応答の時間が持たれた。

(関西学院大学社会学部ほか非常勤講師  
堀江有里、CISMOR リサーチフェロー 朝香知己)



堀江有里氏

公開講演会

## インド建築文化—多宗教の融合・折衷・共存・軋轢；歴史の観点から

共同主催：同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）  
日本オリエント学会

【講師】 深見奈緒子（日本学術振興会カイロ研究連絡センター長）  
【日時】 2023年2月25日（土）15:00-16:30  
【会場】 Web会議システム“Zoom”プラットフォーム

2023年2月25日（土）、深見奈緒子氏を講師に迎え、公開講演会「インド建築文化—他宗教の融合・折衷・共存・軋轢；歴史の観点から」を開催した。講演で深見氏は、インド亜大陸への外来宗教の伝来による土着の宗教建築への影響について論じた。

深見氏は、宗教における建築とは何かという根本的な問いから講演を開始した。宗教建築には、第一に、神や神々の住まう家として、第二に、神や神々と人を結びつける場として、第三に、信徒が集まり、儀礼や行事を行う場として、第四に、権力者と結びついた宗教のプロパガンダとしての役割がある。そして、宗教建築の歴史には、宗教の融合・折衷・共存・軋轢の事例を指摘することができる。インドはこのことを考えるのにふさわしい地域である。それでは、インド土着の宗教がイスラームのような外来宗教と出会ったとき、宗教建築にどのような影響が生じてきたのであろうか。異なる二つの宗教の出会いと共存という観点から宗教建築を考える際、それが建てられた場所の地理的特徴を考えることが重要である。さらに、それらの宗教がイスラームのような世界宗教なのか、ヒンドゥー教のような民俗宗教なのか、あるいはそれが支配者の宗教となったのか、あるいはマイノリティのまま小コミュニティを形成していたのかといった点も考慮に入れる必要がある。なぜなら、宗教の形態によって建築としての現れ方が大きく異なるからである。

インドでは、木造建築から石造建築が生まれたと言われている。石造建築には、石の中に内部空間を作る石窟、石の外側を彫刻のように掘ることによって外部空間に重きを置く石彫、石を積み重ねることによって内外の空間を形成する石造がある。インド土着の建築文化は、柱を中心とする点が特徴的であり、柱から列柱へ、そして周廊や内部空間の柱へと発展した。柱を中心とするこの特色は、木造から建築が興ったことに起因している。さらに、屋根を積み重ねる建築様式や周廊で囲む文化もヒンドゥー教の中で培われた。しかし、12

世紀後半になると、このような土着の建築文化は西アジアの建築文化から顕著に影響を受け、そこにアーチやドームが取り入れられることとなった。これには、イスラーム勢力がインド内陸部へと入り込み、デリーをはじめとして数々の地域に拠点を置くようになったことが影響している。西アジアでは、イスラーム成立以前からレンガや石によるアーチやドームの建造技術が存在し、イスラームはそれを受容し、利用した。イスラーム勢力は、モニュメントとしてのモスクや墓をインド亜大陸に建造したため、それらの特徴であるアーチやドームが受容され、インド土着の建築文化と融合・折衷した様式を形成したのである。

とはいえ、融合・折衷の度合いは地域によって差異がある。なぜなら、在地の伝統の強さや風土による規定、外界からの地理的影響の差異、権力の大小といった地勢的状况、支配者の嗜好といったさまざまな要素が宗教建築に影響するからである。また、何らかの理由で忌避され、受容されないことのない造形も存在し、それは宗教間の軋轢として解釈することもできる。

加えて、インドでは、宗教建築の転用や活用においても、マイノリティとしてのイスラームとマジョリティとしてのヒンドゥーとの間で相克が生ずる場合がある。宗教建築から宗教性を取り払うことで、文化財としての保存や活用も可能であり、さらには、他の宗教建築として転用される場合もある。しかし、その場合には、元の宗教を象徴する像はそぎ落とされたり、白塗りされたりすることとなる。そして、以上のような、インドの宗教建築における融合・折衷・共存・軋轢を考える上では、イスラームの視点のみならず、ヒンドゥー教やジャイナ教のような土着宗教の視点もまた必要になるとして、深見氏は講義を締めくくった。講演会には52名が参加し、講演後には活発な質疑応答が行われた。

（CISMOR 特別研究員 鍵谷秀之）



深見奈緒子氏

## Half Century of Iranians in America: Generational and Gender Differences

主催： 同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)

共催： 日本学術振興会 (JSPS) 科学研究費基盤 B「ムスリム女性移住労働者の国際移動とオートノミーに関する比較実証研究」(19H01464: 中西久枝)

【企画者】 中西久枝 (同志社大学グローバル・スタディーズ研究科教授 / CISMOR 幹事)

【講師】 メフディ・ボゾルグメフル (ニューヨーク市立大学シティカレッジ・大学院センター名誉教授)

【日時】 2023年2月26日(日) 13:00-14:30

【会場】 同志社大学烏丸キャンパス志高館1階会議室 / Web会議システム “Zoom”

2023年2月26日(日)、CISMOR主催の国際会議、“Half Century of Iranians in America: Generational and Gender Differences” (アメリカにおけるイラン人の半世紀: 世代間、ジェンダー間の差異) が開催された。講師は、ニューヨーク市立大学シティカレッジ・大学院センターの名誉教授であり、中東系アメリカ人を中心とした移民とエスニシティの研究を専門とする、メフディ・ボゾルグメフル氏である。司会進行は CISMOR リサーチフェローであり同志社大学法学部嘱託講師の西直美氏が務めた。

講演でボゾルグメフル氏は、米国情勢調査のデータに基づく複数のグラフを提示して詳細に説明しつつ、第2世代(アメリカ生まれ)のイラン系アメリカ人の人口統計学的・社会経済的特徴を明らかにし、第1世代(イラン生まれ)との比較を通して今後のイラン系アメリカ人の状況について展望した。

まず、人口統計学的な留意点として、誰がどのような人種であるのか、または、ある人物をどう分類すべきかについては確立した方法がなく、調査手法自体に問題がある場合もある。人種データに沿って分類するとどこにも属さない層が一定数存在するため、分類の際には出身地や祖先についての情報を反映させる必要がある。中東諸国出身者の人口動態的な統計の読み取りは特に困難で、「イラン系アメリカ人」の実際の人数については、データが錯綜し、学会では大きな議論になっている。なお、今回の講演で扱うデータにおいては、自らがイラン人またはイラン系の人物であると認識しているか否かによってその点を決定している。

世代ごとの変化に着目すると、第1世代と第2世代の教育水準が極めて高いことが分かる。25歳以上のイラン系アメリカ人における学部卒以上の学歴を持つ人口の割合は、男性68.7%、女性54.5%と、男女共に全アメリカ人における割合の2倍前後である。また、アメリカ社会における職業別の統計曰く、外科医、歯科医、弁護士、エンジニアなど専門性の高い職種が多い。また、学部での専攻と職業との間の関連性は低い。

次に、ジェンダーの観点で分析すると、男性と同様に女性の教育水準と就業率が高く、特に第2世代においてその傾向は顕著であることが分かる。なお、移民としてアメリカに入国する場合もあるが、最初から移民として入国するより、まずは難民として、または学生ビザによって入国し、滞在期間中にアメリカで就職して移民ビザにシフトするケースが多い。その過程において生じる統計上の問題には留意すべきである。

そして、言語の観点から分析すると、イラン人としての自己認識が垣間見られる。英語の習熟度と家庭内でのペルシャ語使用率の統計曰く、特に第2世代においては、英語の習熟度の高さが顕著でありながら、同時に、家庭内でペルシャ語を話す人口の割合も高い。

以上の内容は次のようにまとめられる。まず、第1世代から第2世代までの経済的・教育的な「成功」が継続している。それに加えて、第2世代では、学歴、労働参加率(LFP)、所得の面における女性の割合が増加することにより、男女差が急速に縮小している。第2世代がこのような傾向を持つ人々であることを踏まえると、今後もイラン系アメリカ人は、男女ともに上昇志向の軌道に乗り、彼らの間における女性の自律性がさらに高まるであろうことが期待される。また、彼らの多くが高い社会経済的地位にあり、英語の習熟度も十分でありながら、第2世代においても家庭内でのペルシャ語使用率が非常に高い。これは、アメリカ社会の主流に同化するかたちでの文化変容に対する抵抗が継続していることを示すデータとして着目できる。

講演後には、中西久枝教授による講演内容の振り返りとボゾルグメフル氏への質問が提示され、その後、会場の参加者と講師の間でも活発な質疑応答が行われた。なお、今回の国際会議は科学研究費基盤 B「ムスリム女性移住労働者の国際移動とオートノミーに関する比較実証研究」(19H01464: 中西久枝)の助成を受けて開催された。

(CISMOR 特別研究員 兼定愛)



メフディ・ボゾルグメフル氏



会場の様子

CISMOR 研究会

## ワールドカップ・カタール大会におけるモロッコ代表躍進の背景とその意味—移民、ディアスポラ、宗教の観点から

主催： 同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）

【講師】 岩崎真紀（松山大学経済学部教授／CISMOR リサーチフェロー）

【日時】 2023年3月11日（土）13:00-14:30

【会場】 Web 会議システム “Zoom” プラットフォーム

2023年3月11日（土）、CISMOR ワークショップを開催した。講師は、岩崎真紀氏である。2022年にカタールで開催されたサッカー FIFA ワールドカップ（W 杯）において、登録選手 26 人中 14 人が外国生まれであるモロッコ代表が躍進したことに岩崎氏は着目し、その背景と意味について、移民、ディアスポラ、宗教という観点から考察した。

2022年のW杯でモロッコ代表は、92年にわたるW杯史上、アフリカおよびアラブ諸国の中で初めて準決勝に進出した。これは、イスラーム諸国の中でも、1992年W杯におけるトルコ代表の3位に次ぐ快挙である。モロッコ代表の活躍は世界各地で支持され、報道でも大きく取り上げられた。

躍進の背景には次のようなことが挙げられる。第一に、2014年以降の王立モロッコ・サッカー連盟による西欧諸国での組織的スカウトである。これはモロッコに民族的ルーツを持つ優れたディアスポラ（本発表では移民2世とほぼ同様の意味で用いる）の選手を獲得するために行われる。第二に、2009年のムハンマドVI世フットボール・アカデミー設立と、同施設を基盤とした長期的視野に立った国内選手の育成が挙げられる。第三に、フランスで生まれ育ったモロッコ系ディアスポラのワリード・レグラギ監督を新たに起用した点である。彼はチームのアイデンティティとしてモロッコというエスニシティを強調し、母語も育った国も多様な選手たちを団結させた。第四に、W杯開催地がモロッコと文化的、宗教的に一定の同質性を持つカタールであったことが挙げられる。モロッコ戦の観客の大多数が、モロッコ代表を自国の代表であるかのように熱烈に応援したため、彼らはカタールにおいてもホームグラウンドのような環境下でプレーすることができた。

1980年代からスポーツのグローバル化に関する研究がなされる中、1990年代半ばになると、労働としてのスポーツのために国境を越えるアスリートを「スポーツ労働移民」として捉える研究が始まる。当初、スポーツ労働移民は経済的に貧しい国から富裕な国への移動という単純な図式で捉えられていたが、研究が進むにつれて彼らの越境は経済的要因だけでなく、移動先の文化、言語、プレーの継続性といった多様な要因が絡み合っていることが明らかになった。スポーツ労働移民とは、金銭だけでなく、多様な歴史的、文化的、政治的要因が絡んだ複雑な現象なのである。これはモロッコ代表においても見て取れる。

今大会のモロッコ代表選手の出生国は、モロッコのほかにオランダ、ベルギー、フランス、スペイン、イタリア、カナダと5カ国にわたる。外国生まれの選手も皆、モロッコにルーツを持つ。生まれ育った国ではなくモロッコを彼らが選択した理由としては、文化的、宗教的同質性や家族の希望、出生国においてモロッコ系住民が置かれている被差別的状況、サッカー連盟によるスカウト、国際大会出場機会増加の可能性などが考えられる。宗教的同質性は特に大きな要因であり、これはチームの結束にも大きな影響を与えた。例えば、W杯期間中、選手とスタッフは試合開始前にはそろって控室で礼拝を行い、ペナルティーキックの前にはクルアーンを朗唱した。休日には宿泊先でリラックスするだけでなく、モスクを訪問した。モロッコ代表においては、エスニシティに加え、宗教（イスラーム）もチームの紐帯を強める存在として機能していたといえる。このような状況は、当然のことながら、多様な民族的、宗教的背景を持つ選手から成る現代の西欧諸国の代表チームではみられないことである。そして、それゆえに一部のディアスポラ選手は、生まれ育った国ではなくモロッコを選択したと考えられる。

とはいえ、上記のような、単一的な民族や宗教による包括化は、肯定的要因のみならず、否定的要因にもなりうる。モロッコの人口の40-60%はベルベル人が占めるといわれ、今大会のモロッコ代表にもアラブ人とベルベル人という二つの異なる民族が存在した。BBCなど複数のメディアでは、今大会においてモロッコ代表がアラブ民族としてのみ語られることに危機感を覚えたというディアスポラのベルベル系モロッコ人ファンの存在が報じられた。また、両親のどちらかが外国人という「ミックス」（日本でいうところのいわゆる「ハーフ」）の選手も、今大会には少なくとも4人が招集された。実際にはこうした民族的多様性がある中で、今大会のモロッコ代表は、チーム全体がモロッコ人として、また、ムスリムとして団結した。しかし、今後、そのような中に、モロッコに民族的ルーツを持たない者やイスラーム以外の宗教を信仰する者、世俗主義者、無神論者などが招集された場合、モロッコ代表は、そして、モロッコ社会やモロッコ系ディアスポラ共同体は、彼らをどのように包摂するのか、あるいは排除するのか。現在のモロッコ代表における民族的・宗教的一体性の強調は危うさもはらんでいるとして、岩崎氏は講演を締めくくった。

（CISMOR 特別研究員 鍵谷秀之）

## 2022 年度後半

### 活動報告

#### 主催イベント（詳細は本文参照）

【オンラインまたはハイブリッド方式（会場＋オンライン）】  
（いずれも Web 会議システム “Zoom” プラットフォームを使用）

2022 年 9 月 24 日（土）

▼CISMOR リサーチフェロー研究会（古代中近東・聖書研究部門）

「第 2 回古代中近東冥界研究会『冥界との交流』」

企画：山本孟（山口大学教育学部講師／CISMOR リサーチフェロー）

発表者：新井雅貴ほか 2 名

コメンテーター：渡辺和子（東洋英和女学院大学名誉教授／CISMOR リサーチフェロー）ほか 2 名

2022 年 10 月 2 日（日）

▼2022 年度 第 3 回 CISMOR セミナー

“White Evangelical Populism: Its Historical, Religious, and Political Development and It's Meaning for US Policy”

講師：Marcia Pally (Professor of New York University, Fordham University, Annual Guest Professor at the Theology Faculty, Humboldt University-Berlin)

2022 年 10 月 22 日（土）

▼2022 年度 第 4 回 CISMOR セミナー

“Zen Buddhism and Jewish Mysticism: Comparative Perspectives”

講師：Boaz Huss (Professor of Goldstein-Goren Department of Jewish Thought at Ben-Gurion University of the Negev)

2022 年 10 月 30 日（日）

▼CISMOR リサーチフェロー研究会（イスラーム研究部門／啓典解釈研究セミナー）

「クルアーンの理解と解釈：古典期ウラマーの実践を中心に」

企画：兼定愛（CISMOR 特別研究員）

講師：大川玲子（明治学院大学国際学部教授）、竹田敏之（立命館大学立命館アジア・日本研究機構准教授）

2022 年 11 月 6 日（日）

▼2022 年度 第 5 回 CISMOR セミナー

“And the Lord your God will bring you into the land that your fathers possessed, and you shall possess it (Deut. 30:5): The Land of Israel in Rabbinic Literature”

講師：ハナン・マゼー (Berkowitz Research Fellow, New York University School of Law)

共催：JSPS 科学研究費若手研究（18K12210：石黒安里）

2022 年 11 月 12 日（土）

▼CISMOR ワークショップ

CISMOR Young Scholars' Workshop 2022-2

（CISMOR 一神教学際研究会 2022-2）

発表者：久保田昌弘ほか 3 名

コメンテーター：浅野淳博ほか 3 名

2022 年 12 月 4 日（日）

▼CISMOR ワークショップ

“The Return of the Absent Father: A New Reading of a Chain of Stories from the Babylonian Talmud”

講師：Haim Weiss (Professor, the department of Hebrew literature at Ben-Gurion University of the Negev), Shira Stav (Senior lecturer, the department of Hebrew literature at Ben-Gurion University of the Negev)

2022 年 12 月 10 日（土）

▼公開講演会

「『ギルガメシュ叙事詩』とは何か」

講師：渡辺和子（東洋英和女学院大学名誉教授／CISMOR リサーチフェロー）

2022 年 12 月 18 日（日）

▼CISMOR リサーチフェロー研究会（ユダヤ学研究部門）

“Jerusalem in Midrash and Jewish Philosophy”

企画：平岡光太郎（同志社大学神学部嘱託講師／CISMOR リサーチフェロー）、石黒安里（同志社大学アメリカ研究所助教／CISMOR リサーチフェロー）

講師：Zeev Harvey (Professor Emeritus, Jewish Thought, The Hebrew University of Jerusalem, The Faculty of Humanities)

2023 年 1 月 14 日（土）

▼国際会議

“Purity Laws in Contexts: From the Ancient World to Modern Times”

発表者：Ada Taggar Cohen ほか 7 名

共同主催：The Institute of Korean Theological Information Network Service (IKTINOS)

2023 年 1 月 15 日（日）

▼公開講演会

「イランの抗議デモにみる中東ユーラシアの地政学：ウクライナ戦争の影響」

講師：中西久枝（同志社大学グローバル・スタディーズ研究科教授／CISMOR 幹事）

共催：JSPS 科学研究費基盤 A（22H00051：中西久枝）

2023 年 2 月 18 日（土）

▼CISMOR リサーチフェロー研究会（キリスト教研究部門）

「〈神学する〉とは何か－性差別と運動の批判的継承－」

企画：藤原佐和子（立教大学文学部兼任講師／CISMOR リサーチフェロー）、朝香知己（同志社大学神学部嘱託講師／CISMOR リサーチフェロー）

講師：堀江有里（関西学院大学社会学部ほか非常勤講師／日本基督教団京都教区巡回教師）

2023 年 2 月 25 日（土）

▼公開講演会

「インド建築文化－多宗教の融合・折衷・共存・軋轢；歴史の視点から」

講師：深見奈緒子（日本学術振興会カイロ研究連絡センター長）

共同主催：日本オリエント学会

2023 年 2 月 26 日（日）

▼国際会議

“Half a Century of Iranians in America: Generational and Gender Differences”

講師：Mehdi Bozorgmehr (Emeritus Professor of Sociology, City College and Graduate Center, City University of New York)

会場:同志社大学烏丸キャンパス 志高館 1F 会議室 (ハイブリッド方式)  
共催: JSPS 科学研究費基盤 B (19H01464: 中西久枝、同志社大学グローバルスタディーズ研究科教授 / CISMOR 幹事)

2023年3月11日(土)

▼CISMOR ワークショップ

「ワールドカップ・カタール大会におけるモロッコ代表躍進の背景とその意味—移民、ディアスポラ、宗教の観点から」

講師: 岩崎真紀 (松山大学経済学部教授 / CISMOR リサーチフェロー)

共催イベント

【オンラインまたはハイブリッド方式 (会場 + オンライン)】

(いずれも Web 会議システム “Zoom” プラットフォームを使用)

2022年11月7日(月)

▼国際会議

“Revisiting Identity Politics in Iran and Its Surrounding World in the Age of Information Warfare”

企画: 中西久枝 (同志社大学グローバルスタディーズ研究科教授 / CISMOR 幹事)

講師: Seyed Ali Alavi (Lecturer, Near and Middle East Section, School of the languages, Cultures and Linguistics, School of Oriental and African Studies, University of London)

会場: 同志社大学烏丸キャンパス 志高館 1F 会議室 (ハイブリッド方式)

主催: 同志社大学グローバル・スタディーズ研究科

2022年11月19日(土)

▼CISMOR リサーチフェロー研究会(イスラーム研究部門)  
“Standardization of Halal Standards and Dynamics of Diversity in the Global Era”

講師: Nadrattuzaman Hosen (Lecturer at State Islamic University of Syarif Hidayatullah) ほか3名

企画: 大形里美 (九州国際大学現代ビジネス学部教授)、西直美 (同志社大学法学部嘱託講師 / CISMOR リサーチフェロー)

会場: 同志社大学烏丸キャンパス 志高館 1F 会議室 (ハイブリッド方式)

主催: 科学研究費基盤 B (22H03846: 大形里美)

2023年3月4日(土)

▼講演会

「最新の考古学調査から語るイスラエル王国とユダ王国」  
“The Kingdoms of Israel and Judah in the Light of the Latest Archeological Researches”

企画: 小野塚拓造 (東京国立博物館学芸研究部主任研究員)

講師: Omer Sergi (Senior Lecturer, Department of Archaeology and Ancient Near Eastern Cultures, Tel-Aviv University), Yuval Gadot (Professor, Department of Archaeology and Ancient Near Eastern Cultures, Tel Aviv University)

会場: 同志社大学今出川キャンパス 良心館 204 番教室 (ハイブリッド方式)

主催: JSPS-ISF 二国間交流事業 (120228405: Oded Lipschits、小野塚拓造)

2023年3月9日(木)

▼ワークショップ

第25回アッシリア学研究会

発表者: 新井雅貴ほか2名

会場: オンライン開催 (Web 会議システム “Zoom” プラットフォームを使用)

主催: アッシリア学研究会 (代表 渡辺和子、東洋英和女学院大学名誉教授 / CISMOR リサーチフェロー)

2023年3月17日(金)

▼シンポジウム

「比較宗教教典研究会総括シンポジウム」

発表者: 戸田聡 (北海道大学文学研究院准教授) ほか10名

会場: 同志社大学今出川キャンパス 神学館共同研究室 (ハイブリッド開催)

主催: JSPS 科学研究費挑戦的研究 (20K20499: 戸田聡)

2023年3月26日(日)

▼国際会議

“Toward Peaceful Alliance and Cooperation in the Caucasus Tectonic Changes in the Region”

企画: 中西久枝 (同志社大学グローバルスタディーズ研究科教授 / CISMOR 幹事)

講師: Rahman Shahhuseynli (Diplomat and Researcher, Azerbaijan), Anar Valiyef (Professor of the Department of Public and International Affairs, ADA University, Baku, Azerbaijan), Mostafa Khalili (Project Researcher, Chiba University)

会場: 同志社大学烏丸キャンパス 志高館 1F 会議室 (ハイブリッド方式)

主催: JSPS 科学研究費基盤 A (22H00051: 中西久枝)

お知らせ

CISMOR の出版物である『一神教学際研究 (JISMOR)』と『一神教世界 (WMR)』は、電子版の需要に鑑みて、かねてより機関リポジトリの導入や当研究センターウェブサイトでの PDF ファイル公開などによる電子版への移行を進めてきました。これらの出版物の公開につきましては、電子版のみの発行となります。

CISMOR 最新情報を発信中です

<http://www.cismor.jp>

CISMOR ウェブサイトより、最新情報を発信しています。出版物をはじめ、過去の講演会の動画、ニュースをご覧ください。

発行	同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)	TEL	075-251-3972
	〒602-8580 京都市上京区今出川烏丸通東入	E-mail	rc-issin@mail.doshisha.ac.jp
編集	CISMOR 編集事務局		cismor.journal@gmail.com